

10
5
150

伊豆島巡視目錄

附四三
錄

館書圖京東				
三	一	カ	一	
冊	九〇	架	〇	類門
	號		函	

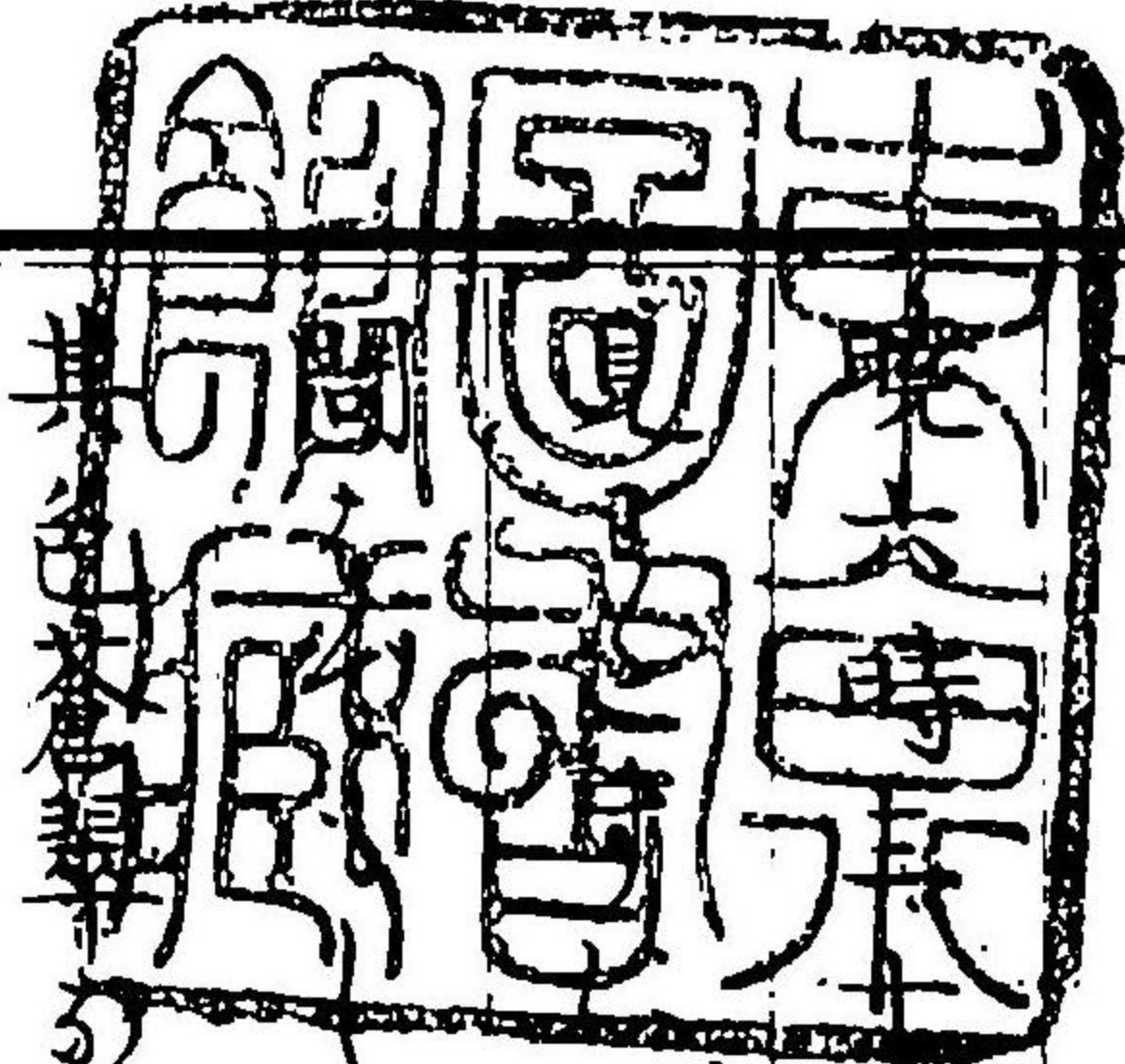


伊豆島巡視日録

卷三

伊豆島巡視日録卷三

七日



191779/V.

分船八丈島三根村の神湊小抵る島のさゆを
宛然と八采の芙蓉右のかこ小聳るそのも
るき八丈富士あり左のかこに高嶽重疊して
其色蒼翠なるそのハ三原山なるく一兩山の間地勢低く
蜂腰のまきに断えんとまろり如く神湊其低き所の北
端小ありていさう湾形をふるといふと数丈の怪巖

竹中邦香編



累々として突起し波その巖をうち越し岸を衝て碎くる
こと雪山の崩るゝ如し其間小澗さ僅小三四町をかり
うんと波少し静なるところありて舢舨を漕き出さず
に本船小漕きよせよとて乗り移りけり波高くして簸
揚甚しく加る小雨まゝ強かりけり満身潮水と雨水と
小霑ひたること三宅島小着きたる時小劣らすやうやう
にして磯邊の岩石相並ひたる間小渠のやうに窪みたる
ところありてそこに船を着く磯際小人家一軒もあらず
た船小屋の十たよりありのみ其中小入りて雨を凌ぎ
けり群まゐる島人を見るに是まての島々と違ふ一人の

女子ありまゝ多く牛を牽き来たりる人とも乗らしめ
荷物をも搬くる然んとての設ありてなると牛後小徒
ひいさゝかある坂を上き上極ゆる平坦にして水田
多し七島の中稻を産するに獨り此島の磯際より十二
町をかりにして初めて人家あり即ち三根村とて村役場
に入り朝いひくひとさうり閑澤うらとわの花とい金川
兼三郎といふとこの家を宿りとてさて島の地形を按を
る小日本地誌提要小八丈島に御倉島の南少東二十里下
田港の南南東四十七里にあり周四十里十三町とあり其
幅員に南方海島志小南北七里餘東西三里餘と云り島

中大賀郷三根末吉中之郷檉立の五村ありて、今我々宿ま
る三根村、其北小位せる所あり、此島の名義、由て起る
ところを尋ぬるに、まづ三島明神縁起小七番の島、遙の
沖ありとて、おきの一はと名付、おきの、此島を指し、
まづやいらぬ、さうさ小因て考るに、百鍊抄に、隱岐
島小はくして、其説は、隱岐の沖の義ありと、つり、南方海
島志ふ、一はやうけ島といふ、や、ハの字の義、この島ハ
つ目に開き、さう故あり、さうけの嶽の義、嶽、畫多く、丈と、
けの訓あり、故に、書き替へると見ゆ、遂小音小讀て、今の名
とありぬ、又女護島とも稱せり、中土に、女國、又女人國、

韓人の女子の都なと稱せり、と云つり、然るに、伊豆七島記
に、まづ一説を為して、源為朝、伊豆の大島小配流せし、
此八丈島小つられ、其頃、さうや、島小男女とも小住、
故、女護といふんも、いづなりとて、島人ら、為朝の徳を慕
ひ、八郎島とよみ、せし、さう島の方言、小郎を、ちやうとい
ふゆゑ、さうちやう島さうし、と物か、さう星移り、さうい
訛りて、今八丈ともふ事と成り、さうい、まづ、さう為朝の名小
さう、さうの、さうんと云つり、兩説孰ま、是あり、を知ら、
とも、元來、さうちやう、さう事、古の詞、さう見る、さう、其
何の義あり、を知ら、さう、先づ、此名ありて、後、小八丈

の字を填り用ゐる。その思ふべきを必らず轉訛する所ありて、今の名といふ所あり。上より、女國、女人國等の出典を考ふるに、後漢書東夷傳小、海中有女國、無男人。或傳其國有神井、闚之、輒生子。又文獻通考の四裔考小、女國慧深、云在扶桑東千里、其人容貌端正、甚潔白、身體有毛、髮長委地、至二三月、競入水、則妊娠、六七月、產子、食鹹草、葉似邪蒿、而氣香味鹹。又太平御覽外國記小、周詳泛海落綜岐上、多紵、在三千餘家、云々是徐福童男之后、風俗似吳人、章曰、綜機縷、又織文八丈島於機杼、故名以綜岐、蓋彼未詳島名故也。又韓人著き所の、日觀要考小、女子郷ありて、其下小、東南有

八丈島、地大、民衆女居、什七八、故名、今屬倭。是等ど據あるく、圖書編小、伊豆州相摩州を圖し、海を隔て、東南の女國界小至ると註し、是亦以て證とす。此他、韓人申叔舟、海東諸國記にも、女國を記せり、但し距陸奥十三里とあり、謬とす。又島の開け、何の時代あるかを按ずるに、絶て古書の徴をくまざるなり。南方海島志、古へ未だ吾邦の版圖に入らず、定まらざる島主といふも、かく神主あり、一島を治せりと思ふ。故小後漢書小、一國ふ立つといひ、伊豆海島風土記小、此島の開け、いつの頃、何人の住始めりとす。詳あるされと

も島の一寺宗福寺の世代記等古き書物を尋ねるに天
 文の頃の住持浮迹といふ僧の書記に置るにそのみ孝
 安天皇の御宇に異人神眷族を帥して東南の海に至り島
 を十餘り開く其中小遠き島三つ則ち此八丈及び小島青
 の島ありあり見えたり是を考ふるに孝安天皇の御
 宇に如是の沙汰有りし事を聞くと孝靈天皇の七十二
 年小秦の徐福来朝時小始皇仙術を好み東の海上に遊行
 あり爰小於て徐福をして童の男女千人を引連させ海小
 入とて蓬萊神仙不死の藥を求むるに其藥を得ず
 徐福誅を恐る敢て歸らず熊野小在り趣本朝通紀等の俗

書にも見えたり此説正しく彼の藥を採らん為め男女
 千人の童を此海の島々に配し置徐福熊野小在て死すれ
 ども配島の男女も再び歸る事を得ずて島小住付たり
 にも孝靈帝の皇居ハ大和國黑田廬戸シロタノホリトの地あり熊野浦
 より此海を東海といふ一若此事の皇代をいやすつ
 て孝安の御宇といふ浮迹に記しありあらんかといふ然
 るとも徐福熊野小死すといふ配島の男女も再び歸るこ
 とを得ずて島小住付たりやとの考ハ牽強の臆
 説に近く且徐福の事ハといふ荒唐にして信するに足ら
 ず伊豆の三島神社ハと賀茂郡白濱より遷り祭る

とらりし。白濱村小。今ある白濱神社あり。此やらの
の創建。孝安天皇の御代小あり。前の大島の條小。つ
る。如し。然るに。幕府の時。八丈島御用船より。白濱の神社
へ進獻米あり。事いと。海あり。と。つ。書ると見え。と
ま。いか。く。以て。孝安天皇の御代。は。開け。と。つ。と。と。
ゆ。あ。よ。あ。き。事。い。い。く。思。ち。た。れ。と。文。獻。の。徴
す。き。の。あ。き。を。如。何。せん。夫。より。下。り。て。延。喜。式。神。名
帳。小。伊。豆。の。國。賀。茂。郡。の。神。社。四。十。六。座。の。内。嬉。婆。夷。命。神。見
え。今。此。島。小。優。婆。夷。神。社。あり。て。則。ち。式。内。の。神。あり。延。喜
以前。已。小。内地。に。交通。せ。こと。久。き。を。見。る。其。後。源

為朝の島小。保元物語小見えて。大日本史
にも載られ。疑ひなき事あり。其保
元物語小。是。伊豆國住人狩野介茂光。領あり。聊の
年貢をも出さず。古々とあり。為朝の。以前。已
小貢をも納。こと知る。海島風土記。大賀郷宗福
寺の事を記して。六世の内。入道宮と唱へ。神佛小限らす。
諸事を司りて。島の長たり。寺にも俗家といひ傳
ふ。是を考ふに。若し。為朝の。島。た。た。残。け。り。末。葉
より。島。人。宮。と。崇。め。稱。なる。や。又。此。宮。は。仕。た
る。その。大夫。と。唱へ。神。主。様。の。その。宮。と。大。夫。と。主。従。小

て島を一圓小押領一在リ一を。武州うか川の領主。奥山宗
林家来作右衛門太郎と云ふのを。康正二丙子年。島一さ
向。彼の宮。雲加入道一子。若宮といひ一その。并二大夫を。
同年うち捕一ゆ。名。雲加入道。カ及も次。作右衛門太郎小
降参して。島を神奈川へ渡一。其後せん一い。あ。討。ま。く。る。
一子の為。免。發。心。して。名。を。端。翁。宗。的。と。改。め。自。分。の。屋。敷。を。
直小一寺一して。加奈川の宗興寺を請待一。住職させ一。か
るく一。作右衛門太郎。康正二子年。島へ渡リ。同十月十四日
小。若。さ。や。并。大。夫。を。討。一。お。も。む。き。島。の。古。き。日。記。と。有。之。
と見え。より。按。ま。る。に。康。正。二。年。ハ。明。治。元。年。より。四。百。十。二

年前に。関東大亂の事を。あ。ま。い。さ。る。事。と。あ。り。け。ら。に
や。南。方。海。島。志。小。ハ。宗。麟。島。を。掠。取。て。後。宗。圓。奥。山。八。郎。五。郎
と云ふ。その。を。代。官。と一。島。へ。渡。さ。夫。より。三。十。餘。年。を。經。て。
朝夷氏初めて。豆州の屬島小定め。北條家より役人を渡一。
貢税を納む。事とありぬ。去々。八郎五郎ハ。今神職。奥山遠
江守の先祖ありとあり。今にも島小奥山氏あり。此説信
ま。き。り。如。し。又。北。條。五。代。記。ハ。八。丈。島。始。て。見。出。さ。る。こ。と
ハ。延。徳。年。中。の。頃。豆。州。賀。茂。住。人。朝。夷。六。郎。知。明。と。い。ふ。者。あ
り。是。より。南。海。小。當。り。て。島。あ。る。と。い。ふ。を。聞。及。ひ。大。船。一。艘。小
人。多。く。と。り。乘。伊。豆。の。下。田。より。渡。海。一。彼。島。に。至。り。靡。か。し。

末代伊豆の國の内たるくさし申付け歸海し早雲ハ此
事を言上を早雲喜悅斜ならずハ丈島見出したる歡賞小
下田の郷を志明小下き花より故小朝夷の子孫下田を知
行を此時より北條家五代へ毎年貢絹を納む其後氏政公
岡江雪小ハ丈の仕置を被仰付江雪下田の住人なり島々
の事能く存したる故あり己小順風小帆をあけて島小至
る江雪島の事あるは萬端意に任せざるも賤くも有る
しと思ひし小さも無く殊小女ハ色白く髪黒く長く艶
容比あり心さほいとやき上々絹を重祢着て立居振舞
悠々たり世間の女ハ紅粉を塗り翠黛を飾り媚るとし

とも此島の習して生きた付の姿その儘して粧點するとい
ふことあり女の業として絹を織ること暇あり去りしに
我國の土産として珍らしき草紙を與え何よりともを
重寶も江雪島より昨日今日と過ゆくはとに數月を送る
南風の時を得て歸帆を解き歸國して島の事とを氏康
父子へ申上ると見え南方海島志小ハ此時妻良村の村田
久兵衛と云ふ士ハ江雪と共小ハ丈へ渡り記録ありしが
今焼失々と見えしうりさて夫より後の事を考ふに天正
十八年北條氏亡び関東徳川氏に歸しと云ハ慶長以降小
宮山ハ兵衛豊島作十郎谷庄兵衛谷彌五右衛門等奉行と

として追々に渡海せし事ありける。谷庄兵衛の時に
いさう。渡海の事やみ。豆州代官のころとあり。大島の手代。
毎年一度うらうて。仕置を申付けらる。寛文十年伊奈某代
官たりしときぞれもやむ。然るに寛政八年丙辰の春伊豆
の代官三河口太忠輝昌幕命を奉り手附百々彦一郎とい
ふとのを従へ渡海し七島残りあく見分のうへ島の法例
貢の制度をふり同年極月歸着を爰小於て人物言語産物
風俗小至るまで詳小あるる。古河辰久筆記小ハソレ
り。世小刊行せらる伊豆日記ハ三河口氏ハ世時の著あり
ハかの書に應齋とありハ三河口氏ハ別號あり其後代官

の自ら渡航せしハ天保九年小羽倉外記用九ありみ羽
倉氏渡航のときの事ハ其自著の南汎録小詳なり維新の
後ハ葦山縣静岡縣東京府より度々官吏を差遣せし事
ありと皆判任官のみにして地方官廳より奏任官の渡航
せしハ今回を始とすといふ是其内地交通沿革の大概か
り。さて前小いへる北條五代記小女ハ色白く髪長く古々
とあり小より心をとめて見るにいかに女ハ色の白
きその多し然も其白さ内地人の色の白さといふも
めに同くハ歐邏巴の白哲人種の白さ如きハあ
らす。禮も下婢やれものに至りてハ色黒きそのもか

うゝも。髪ハ島田鬻のやうに結ひ。西の内紙を細く截りて。俗小奉書とつふものゝ如くおしするも束祢。うろへ傾けたる。鬻の重きもてや。うふ自う横たまりさき。唐人まげとつふものゝさば小類して見ゆ。髪の色ハ。いゝにも黒し。長さハ。髪をときたるものを見え。礼を明らうに知りう。けと。人のつふま。坐して一二尺をふくもの如きハ。通常あり。今少し長さハ。立ちて膝を過るものあり。其最も長さハ。立ちて少く頭を傾きハ。地小ひくこと一尺も。うりのものあり。是等ハ。島中ても。幾人と數ふるふと。あて。多くハ。あゝ。ま。と。つふ。衣服ハ。内地の志ハ。木綿の

類して。帯ハ。幅四寸許あるを。前よて結ふ。よきものハ。手織のきぬの。博多織小似たるを。色々の。しま小。あ。たる。を用ぬ。體格緊。補優柔にして。力を勞むる事。ハ。任せを。たく。飲水を汲。こ。こ。ふ。など。ハ。女の。こ。さ。あ。て。例の頭。よ。つ。ア。き。ま。さ。小。さ。ある。籃。お。と。ハ。背。小。負。ひ。紐。を。頭。よ。ら。掛。けて。搬。へ。とも。其。量。少。く。して。他。島の。婦。人の。比。小。あ。る。を。す。へ。て。量。重。き。もの。く。運。搬。ハ。牛。を。使。ふ。を。常。と。す。男子。の。衣服。ハ。さ。し。て。内地。と。異。る。所。あり。氣。風。い。り。にも。緩。慢。よ。て。活。潑。慥。悍。の。その。を。見。て。言語。ハ。役。人。ま。さ。ハ。商。を。為。し。東京。な。と。く。出。たる。もの。ハ。能。く。解。き。へ。き。も。さ。と。あ。き。もの。を。男子。と。し。

も。解し難きこと多く。此方の言語も。彼まゝに解せざるも
 の。如し。まゝて女子小至てい。まゝて聞き分けく。呼
 べ。唯「オウ」と答ふる聲のみぞ。内地も。べい若く「ハイ」
 と。いふの類あらんと。解るるまてあり。此「オウ」と答ふる事
 々。男女ともに同一。按ずるに。オとウらへ。まゝること。源氏
 物語御幸の巻小。いつ。此近江の君。こゝろ小とりせ。お
 と。いと。りまや。くに。だまえて出来り。又落窪物語小。御心
 て。おほさん方小。おれり。り。ど。の。ま。く。を。お。と。て。立ぬ。お
 とありて。古の應聲あるが。今此島小。其古風の遺るるを。免
 て。去。ま。い。自餘の詞。ま。と。い。う。を。う。り。う。古。へ。り。の。存

せ。る。ま。の。も。あ。る。り。れ。と。お。の。と。其。學。小。暗。け。ま。い。こ。れ。を
 聞き分ること能く。まゝと恨ある。た。幸に。我。う。宿の家の
 三男。助三郎とよふまの。曾て東京府師範學校小入り。修業
 せ。し。ま。の。く。よ。に。て。十。分。小。東。京。訛。り。の。分。り。け。ま。い。何。事
 小も。彼を譯者小用ぬ。小。ぞ。甚。い。便りよ。かり。ま。此。宿の家
 は。う。り。の。ま。は。を。見。る。に。茅。葺。の。寶。形。は。う。り。の。屋。根。ま。て。簷
 さ。ま。低。く。ま。室。の。一。面。を。明。け。て。椽。を。と。り。ゆ。り。い。甚。い。高
 一。床。の。間。小。並。ひ。て。佛。壇。を。設。け。壁。い。ま。板。張。ま。て。蓆。い。所
 謂。豊。後。お。り。て。を。用。ぬ。う。り。簷。の。低。ま。い。風。の。烈。ま。い。より。林
 の。高。ま。い。濕。氣。深。ま。い。よ。り。ま。い。勝。手。の。う。り。い。た。く。み。を。用

ゆき、例のまきむしりを敷きつるのみりて、下男下女等
ハ其上小坐臥をまき倉とツふあり。是も屋根ハ茅葺の寶
形はぐりにて、ゆき比高きこと數尺、腰を屈まハ人立かり
ら、牀の下へ入ることを得へく、俗ハ中二階とツふものに
類シ、柱ハ四隅のみを存シ、牀の下あるところ小柱ハ木も
て、別小一枚を横くたこと、宛ハ刀劔の「セツパ」を挿ミ
くりに似たり。牀板ハ其「セツパ」の上より外へ二尺ちかり
張り出さ、倉の四方ハ板を圍て、たハ一面小戸を設け、
開閉をくくろ、物を出入せらる毎とに、階子をうけて入り、
出まハ輒ち階子を撤き、こも鼠を防ぐ、為免の構造ある

より、廁ハ別小ありて、本屋小接せり、其さゆハ窓の如くに
地を堀り、三面ハ火糞石を以て疊ミ、其一面ハ三分の一
と、石垣を設けり、是肥料を取るとき、人の出入るゝ免ある
ハ、幅ハ縦三間ちかり、横二間ちかりある上小、茅をて屋
を覆ふこと、川舟ハ苦をうけたる如く、石垣のこあるよ
りかまぐ、ハ幾枚も板をうけ並へんハ其横のく、より、苦
の下へく、り入り、板と板とを踏ミ、其空隙より尿尿する
事あり、まき牛欄あり、牛三四頭を畜ひ、まき皆よく肥え
たりて、強壯小見ハ宅地の外よりハ石垣をて圍ミ、内よりハ
松、杉、推、白樟、山茶、桑、柚、橙等、陰暗きむと種多きハ、山寺が

んと宿りたる心地せしむ。後て聞け。島中の人家
ハ大抵斯くの如くありと云ふ。

八日

晴るハ此三根村のさばを見んとて導者をやむ。い
かの助三郎をも伴ひて出づ。村中の路迂曲多く家のさま
らふ同一けき。習をさるとの迷ひ易う。かの村
園門巷多相似の句。此地のよめに詠せしとの如くまつ
役場小つり。戸口を問ふ小戸ハ三百八十六口ハ二千五
百〇三にして。世内男千二百〇六。女千二百九十七ありと
云ふ。さきの上陸せし路よりハ。兩の島よりくも

見きりけきハ再ひとこを見んとて北のく濱邊へ出る
小路くりに石碑あり。則ち羽倉氏。建し所あり。其文小。

八丈島西山ト神居記

藐南海絶島其鎮曰西山。單椒孤豎。頂有天池。能出雲雨。山
陰小丘曰元兼。曰手石。二丘之間坦而饒樹。俗以為海神所
栖。止呼曰神止山。文化中島人興一建白。斬樹伐石。墾為麥
田。歲果增收。其民以飽。天保紀元以來。洪飈屢作。害及舟楫。
人咸駭曰。神失其居。故有此變。請奉向所。闢歸之。榛莽牒入。
余謂不然。島之險遠。漕運難恃。每遭闕乏。輒開口待哺。有類
輟鮓。父老相傳。民及五千。必有飢者。今也口僅一萬。開墾不

加、又欲併其既闢者、廢之不亦謬乎。夫災降有數、認數為神、不可。且神以濟衆為心、吾知其所愛惜、在此民而不在此丘也。雖然、神無定居、民乃迷、瞻仰茲命、吏胥源為民等、卜西山佳處、以為享食所、其樹而不廟者、仍舊貫也。蓋此舉出則獨斷、島人不共、如有神責、殃咎宜在則身、則不敢逃、則遙管此地、恐其或有後言、乃刊貞珉、以告來茲。天保甲午歲四月朔、羽倉則撰、市河三友書。

此碑の前より、向ひを仰け、八丈富士高く頭上小あり、其麓小、一峰の突起せる、文中所謂神止山にして、元乗手石の二丘、隔りて左右小あり、其間白田瀰漫として、麥や

うやく秋あらんと、文中所謂歳果增收とい蓋、實あらん、果して然らば、羽倉氏、此獨斷、島民小於て、千歳其賜をうらむとのとりふ、こを過き、海邊小出き、い、波や、静ある日ありとい、い、波濤、洶湧する、さ、雄壯目を驚、せり、ま、其風猛く潮迅き、い、い、う、り、り、や、あ、んと、想ひ、や、れて、ま、ま、南方海島志小云ふ、此島風多し、一月小兩三度、大風吹く、是時、磯浪八九丈も立つ、又至ての大風大浪といふ、三十丈も立て、民家田畠多く損破し、山野の草木を吹き断り、土まても吹穿つことあり、常小こを憂患と、然れとも、かや

の大風ハ人の一生ハ有るハ無きハの事あり。又雨なくして風とりの時の散濤高く上り。作物草木の葉も盡く潮よて枯ま彫むことあり。而して濤ハ風ハはるくとつとも風無くして浪立ち。海底車の轟小似たる響おひつしき事あり。是ハ遠方の風の餘勢。又潮急よして烈しく湧き來るとき。海底の巨岩小觸ま。白浪起る。車轟の響ハ水底の大石を浪よて滾轉まら響あり。潮汐の進退ハ大概七八尺とつくと浪風小よつて定まらず。又進退方角お東より進み來り。南へ退き。又西へも退き。西よりの進み來り。東へ退く時もあり。但卯辰よりの進み來り。又申酉の方より東へ

進み往く。此二つの潮殊に迅疾あり。なと見えたるハさりとつとくと思はる。助三郎云ふ。今年小入りて。僅小四ヶ月の間小。此島より。西洋形風帆船二隻破損し。其ハ寶勢丸とて。大島差木地村のそり。持てる船あり。一月中。島小つとつに。折り。風潮ことに悪く。八丈の小島の巖小つら揚らと。一ハ二見丸とて。東京のそり。船あり。去月中。此神湊よて。あつ浪のふり。岩小つとつ。二艘ととに。碎けて。微塵とらまると。元來此島の周リハ。岸際よても。海の深さ三四十尋。乃至六七十尋あり。一町は。うらと沖よて。ハ。ちや二百尋より。三百尋も及ぶ。上ハ海底ハ岩

とうりうて。泥沙の類曾て無けし。船を錨を下すこと能
くも。また磯邊の波あつきゆゑ。小船も志なくも繫
くことなりうべく。船を着脱し。直ちに數十人あつまり。陸
へ引き上ること少て。人力の費ること少うく。幕府の時
より。八丈島御用船とくも。二艘の般ありける。是とて
も。岸の波少し高きとき。着くとき故。洋中小漂ひ居り。波
の治りよるとき。陸へ引上る小甚た勞せしものなりとぞ。
去きし今日。いかにしても。陸へ引上るとき。西洋形風帆
船を以て。錨を下し。岸へ着りんとする。最も以て。
危険を冒せる所為とす。其破碎小及ふも。宜あらむ。

や。然れども。今ふ。三根村の。淺沼喜藏といふもの。積善丸
と號せり。風帆船をもち。恙なく航海し來り。是等
真小僥倖といふのみ。又上小といふ。幕府の時。八丈島御
用船の事を考へ。に。南方海島志に。江都の往来に。官船
二艘あり。長さ十三歩一尺五寸。寬さ三歩二尺二寸。四百五
十石積。船頭水主二十人乗。花の縣官より造り賜ふ。歳小
一度江都小至り。貢物を積。獻。總て島の諸用を辨む。三
四月の交。江都を發ち。見え。海島風土記に。此船の
名を。朝日丸。夕日丸といひ。見え。其源委沿
革等。詳ならず。を。神湊と名らるゆゑ。末

吉村佐々木是衛門といふもの海小航して歸るさ海上より望めい煙霧深く島を蔽ふ因て神小祈りて櫓を流しやりけきい煙霧忽ちちきて山見らる程恙なく歸り着くことを得たり夫より姓を更りて奥山といひ又うかたをかんみかると云ふと南方海島志小つくり果して然るもや尚尋ぬべし此神湊より東北のうらにはくある濱邊を底下といひ西のうらあるを垂戸オシドといふ垂戸小い鹽焼くとのあり例の生潮のまゝ薪とて釜にて煮はむる迂濶法ありおのれ惟ふは此島は三宅島よりもあつち一層氣候温暖にして雨少く風烈しけきいかの天日にて製する方を用

のなをも大なる利益なるといふ是等を觀畢り宿小歸らんとする路をのりかの南汎録小戒邑流徒近藤某亦在徒中余與其父正齋交深正齋死十餘年今見其子於絶島為之泣然の句ありしことを圖らむと思ひ出て助三郎のうら小之を誦し且いふやうかの正齋といひ近藤重藏名は守重とて寛政中魯西亞人我々蝦夷地方を掠めしときをりて蝦夷小入りまゝ久しく幕府御書物奉行の職を奉り文武兼備の士にて中小も文學い該博を以て世小聞えし人あり其子ありんといひ多小學問むらりしなりん小とて島小て著し書ふとの傳りりしものいあつちやいして搜

一 来りて得させよと請へい。助三郎答へて曰ふ。其近藤氏
は富藏と稱し維新の後赦されて歸國せしむ幕府瓦解の
後よて便るべき方もなかりしにや。後あつてひ島小返り
来りむし島小返りみむを免のありけりいなり。夫と
共小三根村小住み今いはいく高齡いあはれとおが覆鑠
とておうへ侍りそが住居い今くるべき路のふと
り小あんとつふ死して已小久しわくく思ひ入のが
存生と聞くうに。うち驚るるくをうり。心めつて
やうて彼うき屋を訪ふ小。年五十ありとおはしき女
あり。是則そのむきめあり。翁いと問へい。いさく病ひあ

りてうち臥しそいあきとみやこより来たる人なり。苦
しかくとつふにより内をうかへい。方二間をかりか
ろ一室のたくみもなく古びたる真草むしり小塵はうり
堆きまて積り何やん反古紙やうのそのあきとほみ
うき脚のそこをむしり机小ぼり缺けたる硯かき
る。其側よりうらひ出たる翁い。是そ近藤富藏なり。鬚二
寸のかりに白くのびいつゆあきことありしや。面も
手足も黒きまて小垢つき。憔悴枯槁のきはあきと身のい
け極りて高く骨太く頬出て頤反りロハ方りていさ
は壯年の頃い。容貌魁偉の丈夫なり。なれんと思たる室

内、だくにむさくろしきのみあつす數も限も知らぬ
虱の蠢々としてふい廻るに驚き憫きて得も入らぬ庭先
の木片小腎うちうけてぶちくく談するに耳ハ少一遠き
やうもれも精神更小衰へふりとも見えぬ談話島の地
理の事小及ひくういがの反古紙やうのそのをとり出て
こきを見む。八丈實記と題し島の沿革より古今の事物島
獸草木小至るまでも悉く網羅して遺さぬ考覈頗る見る
べきものあり。富藏云ふ多年辛苦して自ら選著せし所
あり。但た僕ハ生きてより文字の業をきくひ。武術をのみ嗜
うし。父もまた強ひてきく。然も今の世小立身出世を望

まも無學無識あることよけきといふれ。まも。うき事小
思ひ。學問を廢し終小斯く。眞の豚犬といふ。ぬき。從ハ此
著と。大人君子小示き。べき。い。あ。福と。老後の衣食の資
に。う。う。は。く。を。島。の。地。役。人。あ。る。末。吉。村。の。長。戸。路。十。兵。衛
か。ま。き。け。よ。て。日。小。一。ま。い。の。米。を。給。せ。う。る。く。に。酬。へ。ま。
ふ。あ。か。く。い。ま。の。せ。り。あ。り。と。語。ま。り。談。を。り。り。て。宿。小。う。
り。け。ら。が。後。小。関。澤。う。り。より。此。事。を。東。京。府。の。銀。林。書。記。官
小。語。ら。ま。り。れ。を。銀。林。う。り。の。島。より。か。へ。る。ま。に。か。の。八。丈
實。記。を。携。へ。ら。れ。よ。り。是。ハ。彼。々。窮。を。憐。み。草。稿。を。ハ。府。廳
小。買。い。上。げ。ん。と。の。意。あ。る。や。小。ま。ぬ。か。の。翁。名。ハ。守。眞。號

ハ聞齋きんさいも、俳名をハ白石庵井蛙はくしつあんせいづゐといひ、今年八十四歳やうじゅうよんさいふ
るら、其流罪小處そのりゅうざいせうぢよせりききハ、采地の農民を擅殺せんころせり科
小由せうよしてなりと云。

九日

りふも天氣よけきハ、大賀郷小赴おほが郷せうしゆく、大賀郷ハ、島の南部小
て、南ハ海小臨うみせまにミ、村ハ北ハ長く延のびひ、三根村の南端みなはしより、大
賀郷の北端きたはしまでの距離、僅小八九町小過すこすこきも、此大賀郷と、
三根村とを、坂下さかしたニヶ村といひ、檜立ひだて中之郷、末吉すえきちをハ、坂上さかうえ
三ヶ村とよふと、りや、大賀郷の入り口小、楊梅原やまびらといふあ
り、路みちも、りり少すく入りりみさる所小、浮田秀家、秀規父子

の墓あり、石垣を二重小築たかつり、中小櫻の老木あり、當時
植うゑりとのありといひ傳ふ、島人ハ浮田櫻うきたざくらと、あく、花ハハ
重かさねりして、いと美うつくしきよ、伊豆七島記いずななしまのしるしハ、ソツり、墓石の
新あらたらしく見ゆると、四五年前改築かいかんせり、に由るとを、按おしきり
に、秀家の謫たふせりりハ、慶長八年癸卯けいぢやうはつねいみづりして、秀規ハ早く
没なし、秀家ハ、後小剃髮しやくぱつして、久驅くきと號なづし、明暦元年乙未、享年
八十三歳小てみはくはくり、り、さふち、謫居の年數、五十三年
に、りて、り、め謫たふさり、り、ときハ、三十一歳あり、地ハ、備作の
二州を有あり、官ハ中納言小陞のぼりたる身とて、が、る絶島小
うつさき、其謫居中、米の飯いひをまき、筑たかり、りのあり、り、とき、自

ら二椀を喫し、あまりを手巾小はくみ、家族小あそべんとて、どち歸らねしこと、又生涯の願ひも、花房壹岐の所へ申さ、米のりしをうひとて、いふに、當時窘迫のありきは、想ひ見るべし、一日も堪へず、かゝるべきに、斯く長壽を保つべし、こと、不思議とも謂つへし、こゝを見ても、衛生の要し、宴安を戒るにありて、憂思粗食小害なきこと、を悟るべきあり、秀家島小流罪のとき、主從十三人、上乗渡邊織部といふもの、渡海とて、伊豆七島記小見えし、るが、後此子孫、大小戸口を増し、安永三年甲午の書上帳小、浮田家十戸、五百十二人とあり、それよりの後、お増せし、か

らんも、今、詳に、く、明治二年、朝廷恩典を下され、東京小、先、還さき、其宗家、前田、島津、兩家より願ひて、士族小列せし、前田家より、邸宅をあそべらる、今、お板橋宿小住たり、一族の内、島津を住よけし、とて、更、小官小請ひ、島小、く、り、と、の、ありて、そ、今、お大賀郷小住を、蓋し、此島古より配謫の人ありし、こと、史書小見えを、其配謫あま、浮田父子を始とて、其後、難波少將宗勝及ひ、婦五人、慶長十四年十月、此島小流さき、こと、武徳編年集成、丙辰紀行等小見え、爾來配流の地と定めらる、と、の、如く、其中小、名小聞えし、渡邊大隅守、林内藏助、萩田主

馬の三人又天和の初越後光長卿の臣配流の事あり、此他
小い、きくして名高き人あり、事い聞えを古河辰の八丈筆
記ふい、僧澤庵の事跡もありて、書跡も持傳へし家あり、と
いふとも、日本高僧傳を閲するに、釋宗彭、號澤庵、但之出石
邑人、寛永己巳、因事謫羽州、大徳、王室珀、妙心、單傳印、東源、寅
同、配棚倉、由利、津輕之三處、謫居四歲、得者俱還、とあり、澤
庵の謫まきり、い出羽小して、此島よりあり、そこは古松軒
の聞誤りあり、く、さく村小入き、路く、い、濶き空地あ
り、幕府の時の役所のあとあり、と、南汎録小、衙方五十三
弓、環以石垣、前對一峰、峰骨、虬露、庭有熊竹、蘭高、大餘、白葩、紅

葉鮮妍可愛、花南、為義倉、倉東、為炮場、其北桂樹為林、皆交趾
種、又有蒲葵一株、綠葉蔽天、葉間花拆、如綴黃珠、香聞百武外、
なとあり、を見て、島く、い、宏壯あり、そのちりけ、い、
然るに、今、い、一掃蕩盡して、唯僅、數弓の石垣を剩きを見
るのみ、導者其迹傍の、一軒の家を指し、こゝ奥山殿の家か
りと教ふ、此島、奥山と氏と、さうその多し、然るに、今指す所
い、現今大坂小在て、管船局の司檢官小職を奉らる、奥山一
郎氏の家あり、蓋し島より、古より文字あり、そのに、乏く、
内地の役人と稱する、そのく、如き、い、到底企て及ふ、い、ら
さる、そのく、やうに、思ひあせ、い、今現小、官委任小陞り、

その出来は、殊小知てとてちやとあり、夫より少
くゆけし。村役場ありて、小學校も、接も、役場小入り。
戸口物産等の事を問ふ小、戸口四百九十一、人口二千五
百五十二にして、男千〇九十八人、女千四百五十四人と
す。則女子の數、男子よりも多きこと、五百五十六名とす。家畜
は、牛千〇五十六頭ありて、牡四百九十八頭、牝五百五十
八頭あり。此外小、西山小、放牧せし牛、凡百頭ありといふ。船
は、百五十石積の海船一艘、漁船十三艘あり。小學校は、生
徒百零九名ありて、其内女子四名あり。教員は二名の内、一
名は内地より聘し、一名は島近より、此島近年

まき、蠶桑を勵むは、むしより、蠶時、學校を休止し、
以て暑中の休暇小代也。今まきに、蠶事盛ある時あるを以
て、授業のやうを見ること、我得たり。村の内外、處々小墳
塋あり。こゝ古來、島民死して、寺に葬ることあり。皆、家
の近きところに、葬るに由り、其中小、豪富の、その墓
は、結構頗る壯麗あり。そのあり、路を、或る墓地の中に、
碑文の如きものを見る。入りて、こゝを讀む。小左の如し。

大日本八丈大岡郷前崎、澳艱風波乎、農夫丈大夫、勸誘一
村、嘉永己未、新開八重根江頭、成畧矣。公私船舶、得安升降
乎。吏典長感之、白於令、而賞之以材、大黨有焉。其丈大夫者、

宗興寺より僧徒來り續く云々。志うに此寺今ハ豆州下
 田の海善寺の末寺にて浄土宗あり。いつの頃何故宗替
 て海善寺末と成リヤ。其ハハ詳あらず。浮迹ハ天文十五
 丙午年入院。弘治三丁巳年より住職。其後住永祿元戌午年
 入院セリ。僧靈譽宗遊とあり。それより以來代々譽號をつ
 く小より。宗遊より。浄土宗と成リヤ。あると。是ハ分明ホ
 らざる事ともあり云々。又宗端ハ為朝の末葉たるに
 島人。入道宮と崇めりけり。雲加入道。討せたる一子の
 為。発心して。名を端翁宗的と改め。あらんとの考を記
 せり。其文ハ前ハ云々に出せり。如ハ南汎録にも。まこと是

を記して去。過崇福寺。寺主禮順。儀容清秀。嫺折旋。閱其家乘。
 鎮西娶島婦。生子曰。為宗。薙髮為僧。島人奉為君。呼曰。入道宮。
 有稱大夫者。攝行島政。永享中。入道宮雲加。通使武之。金川土
 司。奥山宗鱗鱗。因創互市。後遣兵艦。襲殺其子若宮。及大夫。雲
 加。誓伏乞降。弃家為寺。自號端翁宗的。是為順十八世祖。云々。
 又有秀家國歌。字畫明潤。當時寺主。興秀家為莫逆。歌意蓋美。
 其血嫡相承也。と云々。小より。為朝の子を為宗といひ。為
 宗より。この統胤相續せること。明らりあるもの。如
 し。志のいあんと。羽倉翁も家乘小より。て記る。云々。禮
 して。家乘とい。所謂浮迹。筆せり。時代記。あ。く。思。ち。る。

よして其時代記あるものを見んと。寺主は請ひりりと今
もさせる書きのい。あつたと答ふ。いつの頃散佚せし小
や。惜む。一因て此事を按ずるに。伊豆七島記。為朝八丈
少て。ふりの子をまうく。太郎九次郎九といふ。平家没落
の後。頼朝卿の世とあり。親族のよみあるをとりて。太郎九
次郎九。八丈島。大島を領し。次郎九。入道して。一字を建立
し。父祖の後世を弔ふといふとあり。然まとも。其出所何小
據りて記せしや。知らせむ。大日本史。保元物語と。尊卑
分脈とを引て。子為頼。生于大島。稱島冠者。為朝將。自裁先刺
殺之。次為家。稱大島二郎。年五歳。其母抱而逃。因得脱と記る

よきて。脱して後。いにせしや。やを載せしむ。南方海島志
よ。系圖を引て。為頼。稱島冠者。仲子為家。稱大島二郎。妹女
為賀茂六郎重長妻とあり。大日本史。小合つり。難太
平記。よ。為朝流人の間。小島よ。一男子を出生。窈小足
利義清の所。遣して子と為し。頼朝卿政務の時。件の子。足
利義兼と名乗て。勇氣勝まうり。頼朝内々聞及んて。對面せ
んと。の事あり。義兼。熟ぼし。思ふや。我已小他家を繼くと
雖も。實に為朝の子あり。當時右大将小對し。させる。宿意ふ
し。と。彼卿思慮深く。一家小名あるもの。常小忌
憚り。つり。某世上小於て望ふ。只。佯狂とあり。頼朝卿の

心を休めんと云々。とあるを海島志小為家後義兼と改名
せしあらんとしつり。去きとも大日本史の注小難太平
記足利系圖並云足利義兼實為朝季子義康養為子然尊卑
分脈云義康之妻藤原氏生義兼則二書之說可疑といふて
こそを取られそ。さて是等の書小據きい為朝の子に為家
としふいりれと為宗としふい見えよ。と鹽尻小為宗と
ありて。これ大島太郎と其弟小大島二郎為通大島七
郎朝宗としふを載せ。此の如く諸書區々にして適従する
所を知らず。おろ瀧澤馬琴。椿説弓張月の附録小諸書を
参考して系圖を載せしつり。弓張月の戲作の小説ありとも。

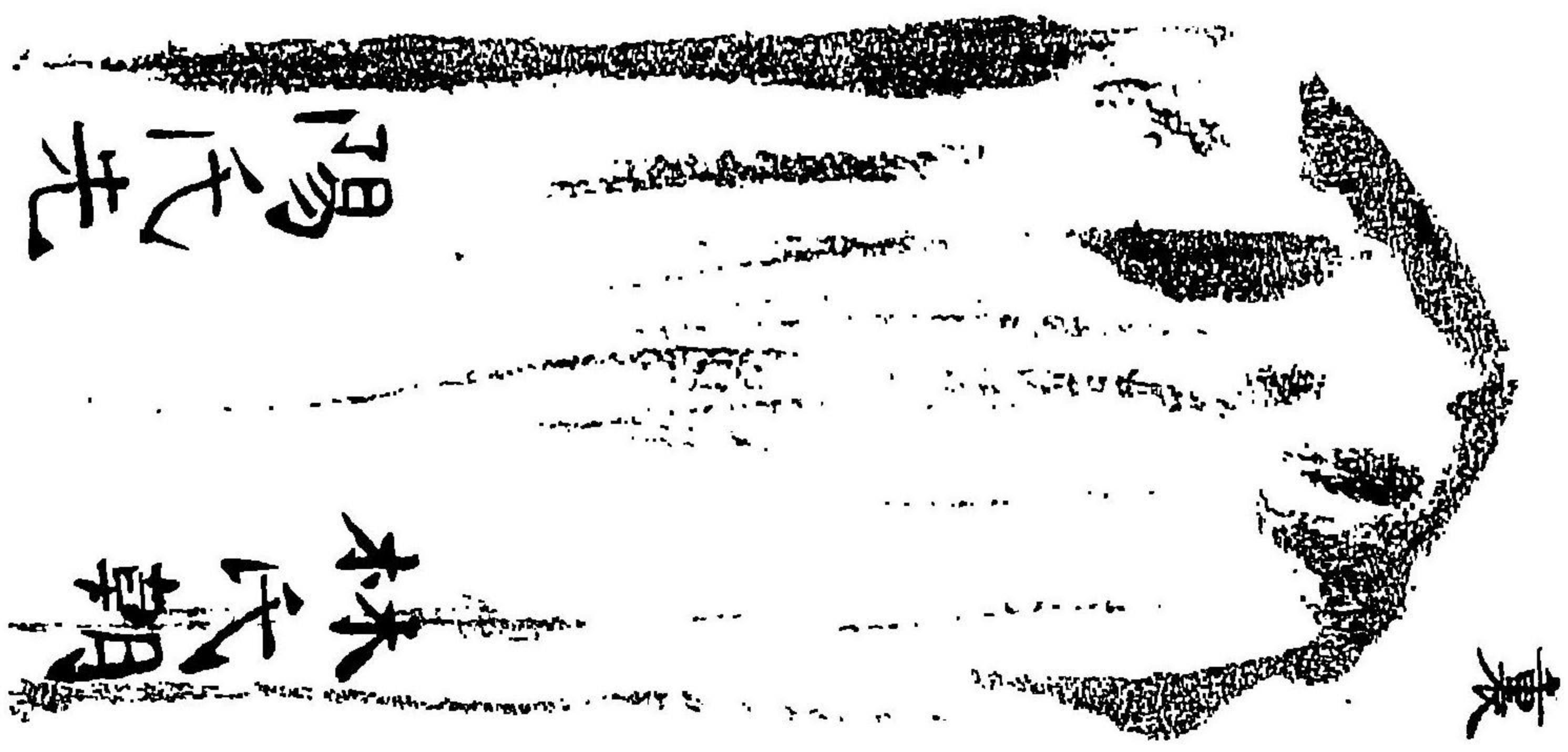
附録ハ戲作小とありとも併せ觀るべし。兎小角小為家
脱るゝことを得たる後其終るところ史書小見えよ。とも
永く此島小留りて其後裔雲加入道す。相續せしあらん
も或ハ知るべし。若し然らん小為家衆小為宗とある
宗ハ家の誤りやあらん。おろ博雅の後考を俟つ。さて此寺
ハ前もいへ。如く今ハ浄土宗あり。昔より肉食妻帯
一子孫相續するること。火宅僧小同一伊豆日記小此事を記
る。て云ふ妻をもち肉をくらふ事をいまり。それをい
ふと問ふよ。かゝる遠き海の中。只一つある島あり。ハ
わたり來る僧ハ。まれあり。けし。して住僧代々其子を

僧として江戸の増上寺へ出て佛の道まかたせめて後住
 とをいふくふ里かうして長く傳燈のうえさらん事を
 祢ふふゆゑふあうありと見えたり前小つくる南汎録
 小美其血嫡相承也の句あるをうたてよくうり所
 謂秀家の國歌あるをを見るに二首ありて一はあま
 ち南汎録小いふところのそのあり一は秀家の一日寺に
 来らぬに折し寒きはよく住僧綿帽子をうり居
 を秀家小對し脱んとせしをさあせをとて取りあへも戲
 ま小口まをさまきしそのありといひ傳ふ紙は極先て粗糲
 あるものとして大きと左の如し。

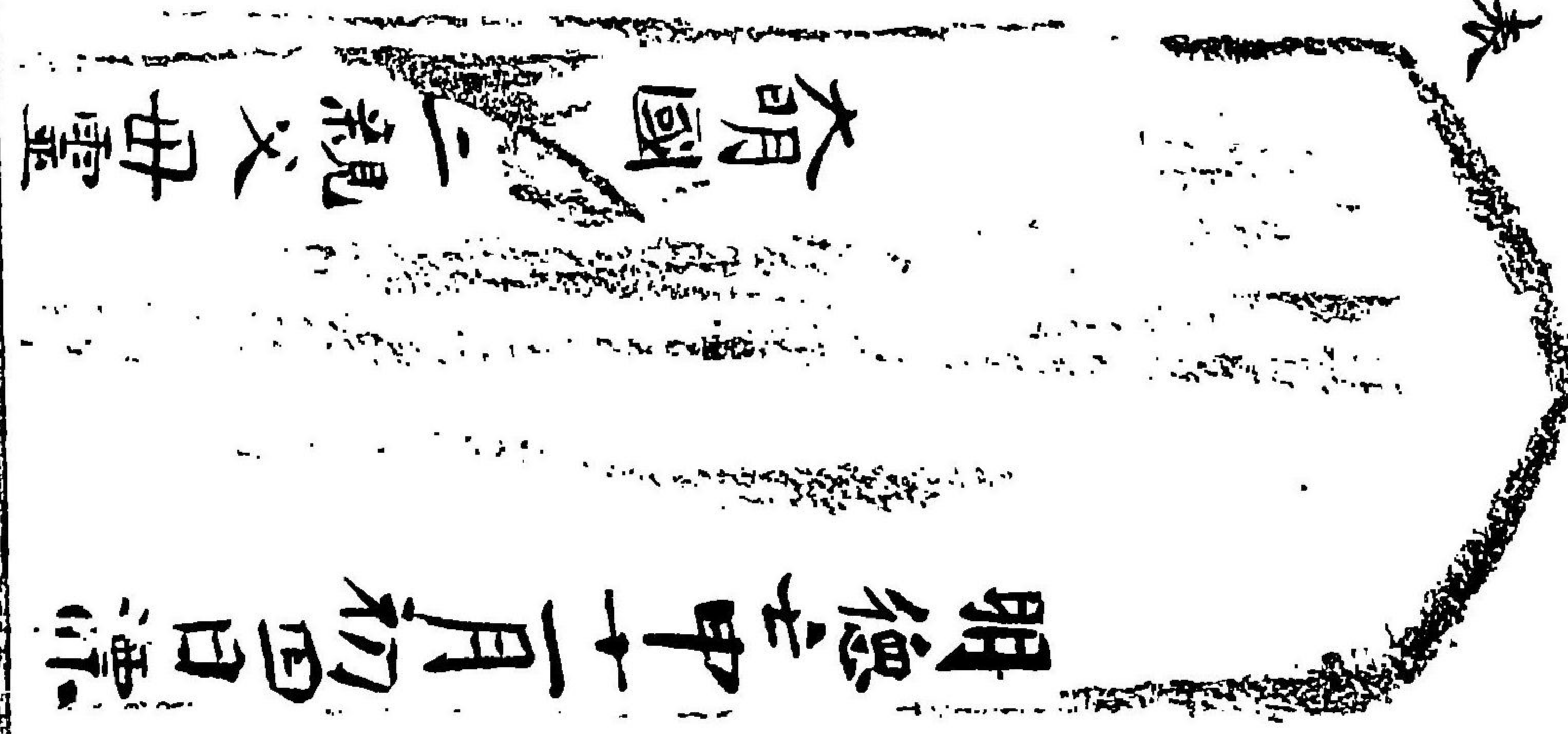
はあまの松のうゑに松入はあま

ふのり松をうり居

けふハ此寺を宿りしを寺ハ海雲山と號シ是も浄土宗ノ
 て亦肉食妻帯と南方海島志小此寺の事を記して云ふ明
 應中明國海舶漂流至此船覆人歿幸免者亦不少矣適遇疫
 疾相繼病没宗感者獨得保天年島之所由菊池氏始創此寺
 令宗感住之今寺藏神牌と請ふてその神牌あるそのを見
 るに極りて粗笨ある木製して鏽おとをも加へる長さ一
 尺二寸餘幅二寸とあり古色黯然としていろいろは當時の
 ものありく見ゆ其表裏小あり付けたる文字ハ左の如
 く刀法もまゝ極りて古拙あり。



裏



表

親大尊

五洲

まゝ寶曆三年癸酉、此島へ清國の船漂着し、たゞを此寺に
やと置きけり。衆組のその七十一人、其破船の古木を
以て門を造り、寺附し、其門の記を木に書き、額小した
るあり、書きたるを、彫刻せされ、今ハ黒い、か
らありて、まゝと讀み兼る字もあれと、意を以て解讀を
るに、左の如し。

海雲山長樂寺、乃日本伊豆國八丈島之古刹也。山巒聳翠、
林木爭榮、茅簷數椽、勿弱於華椽畫棟。列刹山岡、無異於南
海普陀。昔年始創者、菊池武郷之令祖也。而今奉祀者、吾邦
先朝大明國宗感師六代之僧通詮師也。開林以來相傳二

百有八年矣。歷世靜修。敬奉大士。滋法雨而潤。及四生布香。雲而蔭。于千界。予自癸酉之冬。航海。失航料。無得生。皆賴神明。點佐。安寧。泊此。深蒙島長菊池正武之仁慈。各長者之厚愛。通船七十一人。全得保餘年。予居寺半載。承通詮師朝暮安慰。甚憐。故國之人。情意綢繆。實有同鄉之誼。予曾中素無文墨。序賦不能。勒銘無克。惟畧敘銘感之心。以記懸寺之新造。山門。而垂後耳。時大清乾隆十九年歲次甲戌四月。建造山門。惟望後之同志者。樂輸整修。永遠恒新。千秋不壞。則後之功德。於無量者也。

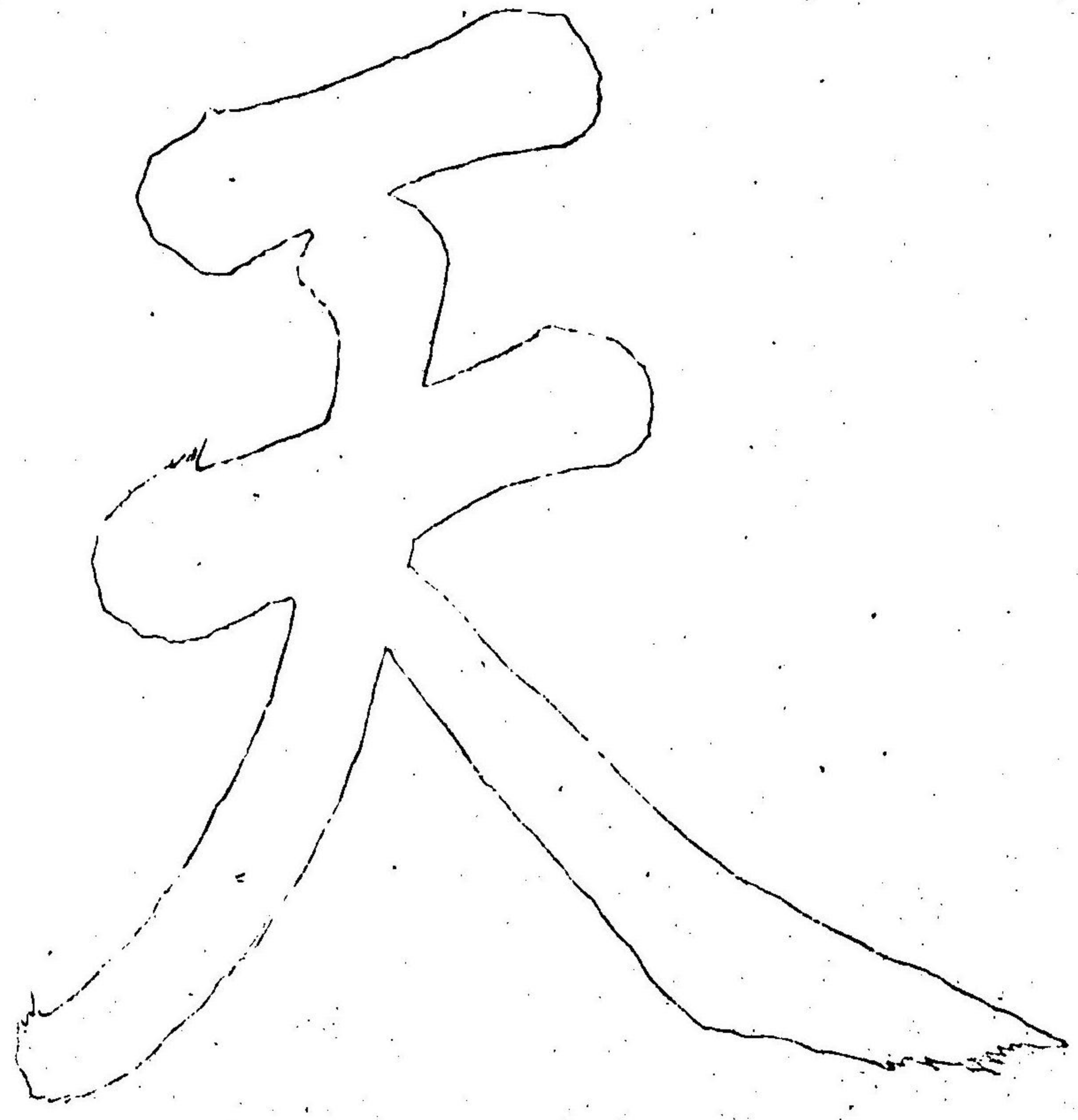
寶曆四年甲戌三月江南雲間程劍南

浙江苕溪高山輝暨通船人衆同立

福建榕城董昌仁

伊豆七島記小。此門の事を記して。清人の中小大工の妙手ありて。唐山風の門とて彫物ふとに巧みなることみるべし。の眼を驚くも。此島とい似たり。いゝうぬちかりの門ありき云々。此樓門とて。きて。舊ひ壊れしを。建直しけり。誠小遺憾の事ありと。人々ふいひあつりしを。志し。あくら。其頃の扁額のみ。あ。今の門は。掲げらる。文化のた。先江戸とて。長樂寺小紋と稱し。云々の小紋。一時流行し。うら。こは。の長樂寺の額の縁小彫り付。紋うを寫

一 出せしものありとていひしとてふら然るにその建
 直せし門とまゝとてあひしよや今門もあつたぐ柱二
 本を立たしものも但し聯額に今なき寺に藏と是は高程董
 の三人少て書きたりとおぼし長樂寺と書きたる額と
 海雲山とあるものとまゝと聯と手跡たのしくたり就
 中聯と天成の二字を大書したるものといひ文衡山とて學
 ひしやうの書風とて筆力あり羽倉氏の觀浙入高山輝書
 蒼勁可喜といふれし是よやあへん



光

共

普

仰

照

恩

成

海

宇

均

雨沾

福

澤

威

沾

惠

澤

旱

敷

商 穆 威

沐 恩 膏

惟ふ小山輝等ハ商人少ク必しも文字小任まらざるの如ク
ちあききき一然るに前ハ掲ぐりやうの文もはくり又
書も斯くをかりよいかけり顧みて今日さうさうにの豪
商おと稱まらざるのを見るに中より御國のこととまきん
文字さく辨へま或いははくりをさうさうにみぢかきふ
した小書くおとのものもあり或ハ郵便さうまに親展と
傍記ハ何某様と當てさる名下小殿下おんと書き或ハ精
養軒ハ軒を斬と何斗何升の升を舛と樓の字の草體
を極小はくり違の字の楷書を遠小誤るの輩も少くも
豈愧つしきの至あききや又其頃の流人のうち此寺

の事を記したる文あり。左小掲く。

八丈島大岡郷海雲山長樂寺記

大岡郷有梵宮。曰長樂寺。幽僻窈窕。而百草鬪芳。群花爭艷。之境也。加旃重嶂。峭峻于面。巨浸湛乎背。千松蔭藹。萬竹踈蹊。菴欄護葩。灌圃沐綠。青蘿一墻。四鄰千里。苔徑清滑。塵穢自絕。猶且瞬目。則西山寺北方一里。屹立。疑乎蜃氣。結樓眺望。則小島寺南方二里。鬢隸如粧。似黛。或落霞岫雲。及疊瀾。紛紜髣髴。厥餘江霧。變態波濤。作色戲乎寔。圖畫宛爾乎哉。儻夫晨燈之轉。經暮鐘之唄。讚教群寢。不覺轉入於西方樂邦。暗竭慾海之情。瀾茂性田之善果。乎爾。乃閑址之濫觴。緬乎邈矣。古

老相傳道。是地往昔存一茅堂。號曰海雲山大善寺。雖然實

為歲月。誰人草創。未曾有知焉者。繫天文十六乙未年。大明

餘艘。雄濤凶險之日。飄泊于茲。島有一沙門。曰宗感。道號器

字温雅。神表慍爽。草行露宿。丐乞民間。而放曠隨緣。然鄉俗

亡慮。漠爾當時。島宰菊池武歲。從元祖右助武信。三代嫡胤。市右衛門也。特賞心

而待之。甚厚矣。公私餘暇。愛敬招請。而討論現當之真益。感

示諭言。夫諸佛出世之慈教。誰敢優劣焉。以予觀之。則莫加

施無畏。薩埵之弘濟。所謂慈眼視衆生。福壽海無量之金言。

請勿生猶豫矣。武歲篤故信受。不吝家貲。彫刻聖像。案置于

大善寺。乃令感而住持也。故號曰觀音堂。振爾已降。凡有水

早疾疫妖星厲鬼之患難則烝民奉香華運乎萬祈故一鄉
祈願所之稱肇于茲越星霜荏苒寒暑沍更經歷二百有餘
載暨於宗感五世法嗣長圓道號堂宇腐蠹樞橈傾斜覆苫
亂墜上漏下濕荒廢之衰羸極矣圓慨然豐々乎興隆臥蘇
枕堞殆忘寢食遂勸勵島中籍戮民力則風馳響應撮壤崇
山之經營不日而落成賸改易往古大善寺號稱長樂寺可
謂當山之中興矣六世現住通詮則圓之嫡嗣也是歲寶曆
三昭陽作噩窮陰上旬南京泉伯嚴寶載歌歎乃于日本長
崎被睥睨乎綠林輩覆船大風檣折楫摧飄蕩於大岡鄉八重根
表凡七十有餘人嗚訴喪身失命之危狀鳴首菊池治武假名

左門菊池武鄉

自武歲七代嫡孫假名織部

指麾登安頓於長樂寺治武武

鄉首饗矣尋謂山主曰宗感大明飄泊之沙門也菊池先祖

壯圖而為當寺之鼻祖方念也南京之飄客則治武武鄉二

人以雄策而令倚居於當寺嗟冥數循環耶非耶且夫高山

輝程南也二子者飄群之主盟也加之覲了片綫單緒之間

則素闔鐘顏之門也必矣戲乎見之不取則千載叵值請子

該羅山寺古今興廢之創末使二客而鶴舞鸞迴豈謂一好

事而已抑將庶幾乎後昆不朽之劇談山主雀躍曰豈敢不

奉承嘉教竊恐異邦殊俗辭言懸隔云之何武鄉曰聲音土

異字義響同於是顧予而被托草案且見屬文房予謝曰久

謫腐朽。飢寒倥傯。撒擲龍鱗鳳味。日淹歲深矣。奚為敢丁也。
歟。公與山主頻々焉。不聽予復辱不鄙而與斑荊強不憚。聖
漫以就運介。聿縫綴已右之言。而覲縷不忘之藁。只且。

于嘗寶曆四歲。次闕逢闕茂。中和望東都。謫耄寂子。操兗穎。
八丈島大岡鄉。海雲山長樂寺。涅槃法筵。

この文ことに拙くして意味晦澁あるところもあはれども。
其大略を領まぐりだぐ宗感、島小飄着せり。天文十六
年とありて、南方海島志小、明應といへるものとあはれ四
十餘年のふらひあり、孰う是あはれを知らず、まぐり此文意を
以て見まぐり、高山輝等小、寺の顛末を書うせまぐりやうに見

ゆる小つげ、まぐりものやあはれと、寺僧小尋祈、まぐり知られ

と答ふ、或は散佚せり、まぐり此長樂寺の對門小島役所あり、

地役人の事務を取扱ふとらうなり、地役人の事、八丈筆記

小、菊池恒七、同左内、同左平次、神主、地役人兼帶、奥山式部、

同左京州五家、家名帶刀御免、給米もあはれ、此格うて、島人の

長くして、流人などの支配をまぐり見えまぐり今、末

吉村の長戸路十兵衛、三根村の高橋郡之助、中之郷の菊池

作次郎、右の三人、地役人をまぐり、この島役所小古印あり、

材、玉柏、少く文、左の如く、背腹両面小彫り、刀法極、免て

精、印色、朱を用ゐる。



龍泉美記

此印も北條氏の時わきまきつゝそのにいて貢の絹小いこま
を押し用ゐる來りりといふだ、北條氏鎌倉の北條ある
や、小田原の北條あるやをききうに記したるそのあり且
東壁謹封龍泉美記とい何の義あるを知らむかのし惟ふ
小篆體八分體及び刀法すても前後北條氏の時小ありり
内地よりかゝる精きそのありを見も蓋し鎌倉北條の

時元僧の渡り來り事志もくあるい夫等の持ち目り
りしを得て其まゝ島小ワレせりありありさるうさて世
絹の事いつの代より織りし先りといふこと詳あらむ
按るるに東鑑小八丈絹二疋大神宮幣物とせむこと見え
續故事談小も世絹の事あり其頃をてに世小とてちやさ
きありあり海島風土記よ云ふ女ハきぬ細を織ること
専らりりて貢物小も絹を備へ又帯織八反しけ合糸織五
反しけ生絹子やうの絹を織りて納る此八反しけ五反
うけといふも常の貢紬八反五反小代を以て其名よと
るく帯織ちむし始えて帯小織り出せり故あり是を織

る小蠶を撰ひ糸をとり其糸をよりほむくに車を用ね
き悉く指少てより杵小うつし染め上げてしぬの模様を
取組む八反うけの機をも用ねるして向ふを柱ましにと
め前腰小つけてりやち其好みにまうせけり織る五反
うけ生絹子平織ゆゑ機小ても織るあり斯の如く八反
うけ糸をほむくに車を用ね織るにも機を用ねる只
人手の功を積むゆゑ其絹和りにて志まりゆく自然と
うるもしきほやありて上品あり又おろくや絹店おとく
賣渡し世上小用ゆる通例の絹八丈一丈又八丈丹後
織とも唱へ上納る絹とも格別方りたるといへとも生

の島絹一、体桑葉よきゆゑ糸性ほろく他國の絹とい大
小違ひ殊々年を経ても染色あせを衣服類小用りて益あ
る絹あり此蠶養織方いつの頃何處の國より傳へ来り
り其とと志を次と見えり去き帯織と八反うけと合
織とおのく別ある織り方のやうに聞ゆとも八丈誌
小西丸御召御用上平黄細合織八丈縞帯織八端掛御船
秋渡海小御繪本渡り糸仕方冬の内練染とも小出来
て春小至り織宿と定めあり家々して織る糸土地の
産ありとあ花帯織とい則ち八反うけして今東京おと
して八反織として婦人の帯小用ねるをそのなる

く合織、普通の八丈は、島にて丹後織とくあへ、則ち貢小納るそのあへ、さて丹後、はといふこと、伊豆日記も、そのあへ、丹後織の志まを、手本として織り、と、然るるや、といふ、花ととも、だ、りあるあ、り、となり、おのれ、惟ふに、今、条文の、そのを、い、ま、といふ、こと、島織の義、にして、此島、ま、といふ、内地、へ、い、く、と、免、り、より、あ、り、よ、事、と、あ、り、い、あ、り、さ、り、去、る、を、後、小、丹、後、小、て、是、小、倣、ひ、條、文、小、工、夫、を、下、し、却、て、出、藍、の、そのを、織、り、出、せ、り、より、島、人、ま、を、さ、り、小、倣、ひ、丹、後、の、名、を、下、せ、り、あ、り、ん、も、知、ろ、う、り、も、又、島、の、糸、性、よ、き、よ、海、島、志、小、い、ひ、

八丈誌、糸、ち、土地、の、産、あり、と、あれ、も、古、い、い、ざ、ら、き、近、世、い、内地、の、糸、を、多、く、用、る、より、已、小、伊、豆、日、記、小、近、来、も、土、地、の、糸、の、少、り、引、足、ら、す、上、州、邊、の、糸、を、船、廻、り、小、ま、と、見、え、よ、も、寛、政、の、頃、を、て、に、然、り、を、知、る、く、上、漆、色、の、事、い、伊、豆、日、記、小、く、ろ、と、び、黄、の、三、色、小、う、き、と、び、い、ろ、の、事、を、島、人、い、か、を、い、ろ、と、い、ふ、す、と、み、と、い、ふ、木、の、皮、を、て、り、然、る、黄、色、い、か、り、や、ま、と、い、ふ、草、を、て、り、然、る、黒、い、椎、の、木、の、皮、を、て、漆、る、と、い、か、り、や、ま、と、い、ふ、の、國、地、を、あ、れ、と、も、と、い、か、り、て、葉、を、か、小、ま、と、い、の、如、き、草、あり、右、三、色、と、い、き、い、の、事、を、い、ぢ、ん、を、は、い、

事なく。又うりも事あり。只漆より劣る事。凡五十遍餘ふ
して。色を得るといふ。さき色いこうを。幾度あつひよく死ても。
色のかもち事なり。といわれ。さき事まかり。凡五十
遍餘といふを甚し。伊豆七島記より。黄ハ七月より九月の
間。かりやまを煎し。漆る事。凡三四十遍。けりて。椿の灰をも
て色を出し。樺ハ冬秋の間。まきみとけりる木の皮を煎し
漆る事三十遍。かりしりて。色を出さ。こと前の如し。黒ハ
漆るに時。かり推の木の皮を煎し。漆る事二十四五遍。小い
田の泥。とて。色を出さ。とあり。こと實を得たりと云。一
或ハ古ハ漆ること。の數を重ぬる。故小品よく。後世。漆數

を減し。品劣まりとの。説をなま。そのもあれとも。黒色を除
くの外ハ。漆ること多きに失をさ。色濃き小過ること。ふ
まハ。古と今と。甚き差ハ。あかりよく。思を。かりやまハ。内
地のものに。異なり。とくとも。別物あり。あつひよく。亦是
薑草の一種あり。んまきみハ。恐らくハ。天竺桂あり。ト然
るに。今ハ。其漆色。此三つ小限るにあつひよく。俗ハ。蒲萄鼠とい
ふこと。とくとも。又其最も濃く。紫小近きとの等。一
て足らず。皆前の三種の原料を以て。漆せ。上小他の物
を以て。色をうく。とあり。と。但ハ。貢納の絹ハ。今小其色。三
種小限り。志は。うくも。一定のとのあり。て。新く。あつひよく。志は。を。

織り出さることありといふ。又現今織り出さるものあり、其名
 各種ありて、其第一と云ふものあり、おむく織といふ。是貢納の
 絹のむくりやうて、志保くら、寸尺地合まて、同一やうの
 しらゝのあり、着料丹後といふも、志保くく、おむく
 織小類をれとも、工女の意匠次第にて新くあるし、ゆを思
 ひよりて織り出、一定せしことあり、幅サく、狭く、鳶細
 い、糸の粗あるものを用ぬ、樺色を主と、志保あく、夜具
 るとになして、然るべきやうのものあり、白細、白地、
 黄細、黄の無地あり、とく、黒の無地あり、多く織り
 たり、今、何の故や、とて無、綾丹後、東京小

て、俗よハ反織といふ、實ハ八反まで、の量あるにあ
 る。太織も、糸屑とて織り、紬の極細と粗あるものあり、男帯
 地、博多織やうあるものあり、志保くく、大小異あり、且織り
 方も麩織あり、又細真田といふあり、所謂絹真田の類あり、是
 其概略あり、此八丈、後を内地へ出さるとき、だくみく、上
 をとけら、糸の色小、五ヶ村れのく、定まりありて、大賀郷
 より織り出さるもの、白、橙立村、樺色、或、樺小白を交、
 中之郷、黄、末吉村、黒、三根村、浅黄を用ぬ、故、此、
 糸を見きり、某村の産といふこと、一目瞭然、と云、抑
 幕府の時、ハ丈織を、ことに貴重せし、遠物を珍とて

と。染色の久しきを保つとに由るべしといふも、又別
小據るところあるとの如く八丈島年代記小、正徳元卯
年九月、御座船新島船より、若君様御召地、羽二重貳拾反、黄
漆小御誂被仰付、同年十月、御漆出来、右船に積入出島を同
年十月、又ハ御船の便小、羽二重貳拾反、黄漆小被仰付、又同
三巳年、御召地御用、羽二重、黄漆被仰付、おと見ゆるより、蓋
一黄色ハ、不浄を除くとの俗説あり、是黄色の染料ハ、蓋草
少く、蓋草もふるち、薬品の一あり、此俗説も起り、小
や、幕府の頃より、醫者ハ、多く八丈一海を、衣服小用ぬる
も、亦是不浄除の説小、基きたるあらん、今日とくとも、醫

家より、おハ八丈一海を著るとの多きハ、此餘習あり、
此絹を貢とせむることハ、伊豆七島記小ハ、紬五百十七反と
あり、南方海島志より、紬六百三拾端二分五厘、内下紬十端半、此内、
小島、青島の分もあり、外小三拾九端、こまハ口紬と云、右古
來上紬あり、貞享の頃までハ、兩うみの分、黄絹十一端あり
と見えて、海島圖記小ハ、兩うみといハ、大永中、小田原北條氏
より、女二人召し、其外小器量より、女兩人撰ひ出、かろひ
置くハ、きより命あり、因て二人撰み出、大賀郷の内、兩所
小屋敷を構へ、きり置く小付、是を上の家美、下の家美とナ
唱ハ、田畠を附と、惣百姓稼き作り、兩家美の扶持米入用小

致もところ小、右二人の女御用あきりに付か、いひ置くこと
止むふよりて、右の田畑御年貢の内小きうへ、古来下畑二
十二段の所、上畑十一端仕来るうへ、云ひ傳ふと見山、明治
の世となりて内地より、地租改正等の事行われ、さきと
も七島より未へ行われ、さきにより、此島もまゝ、舊小依り、
八丈織を貢とす、現今、東京府より、うきを收め、宮内省小
出し、宮内省より御用あき品ハ、入れりて拂ひ下けらるる
事のよし、織物の度法ハ、何さくといふ、八尺を一さくとし、
四さくを一端とす、さきより鯨尺三丈二尺あり、此さくむ
うへ曲尺あり、に寛永十七辰年、豊島作十郎支配の時、

命して鯨尺小改あり、ありとて、南汎録小、寛永中、島尹忠松、
改用鯨尺四策、島民始困、松後溺斃、洋中とある、此忠松とい、
豊島の事ありん、さき度法の事を記せ、因らに量法の事
を考ふるに、是亦内地と異なる、さきのあり、海島風土記より、八
丈島ハ、穀類を量るに、何合何勺といをも、一升以下ハ、何を
い何程と云ふ、一ちいとつふも、両手小一ちいの事より、京
杵二合五勺あり、按さるるに、爾雅曰、一手之盛、謂之溢、兩手謂
之掬、溢ハ京升小あり、見えハ、四勺四撮あり、さきハ一掬
も、九勺弱とて、八丈の一掬とい、大違ひあり、夫手より物を
量るハ、往古升の本あるも、手の大小盛りやう小よりて、

如此の相違あるを以て、遂に黄鐘の管を以て、升を定るこ
とありぬ。又此一斗を十四合せて一升とす。乃ち京升
三升五合あり。其一升十四を以て、一表とす。乃ち京升四斗
二升なりとあり。此法今あらずの如くと云ふ。乃ち島役所
をまかりて、優婆夷神社小至る社に、長樂寺の北小隣に、
式小載せしむる。嬉婆夷命神は、是あり。今、郷社の
格小列せしむる堂宇に、宏壯あり。いあふとあり。りの樹
木。ことに老ひ茂りて、いとわづら。天照大神を祀り、大
山祇命を配享す。大山祇命を、寶明神と稱す。嬉婆夷の神
の像は、木造とす。女体あり。坐の下に、旦那宗麟と認る。判あ

り。寶明神は、三島明神と同躰なり。て神躰は、唐金にて、束帯
の像を鑄けけあり。南方海島志に、いひく。と神座を
開き、とあるに、いふ。果して然るや否や、おのれを知らず、
然るも、察するに、是等のその、今、神座の中より、あふ
て、何とあるに、神を祭るに、像を設ぐる。ことあり。あるま
しき、苦殊小の、うくも、天照大神を、女躰と奉ること、大
ある。謬りなきあり。一拜して、寺に、うり。午餐の後、八重
根の、いふ。ゆんと思ふに、わんづの、破きて、けし。寺
の、いふ。小草履を買つと、命を、なうて、持ち来るを見
ま。い。い。にも、小きく、足の三の二、を足らず。島人の、皆か

く小きものをばくぐりこい雨の時泥のよみ上らさるる
先なる一價を問ひ七足きて麥一升ありと答ふ伊豆
の島々ハ、品と品とを易るのみめて金銀の通用あり
よりの諸書に見えしとどき昔の事して今開けて
大島この三宅島まで物の價を問ひ金とて答へ
らるに此島小至り初めて交易の事を聞きし古風あり
存するを見る一然れども貨幣紙幣と行はれざるよ
いありさだ極めて卑賤のこの日常のものをとるの
るに交易するものあり一寺と出て小きあり
坂を下りしけいやく磯邊小出つ是則ち前崎の濱あり

磯際の岩高く波あつきことい神湊小まきるとも芳る
く見えを其中小少く穂りて岩の低きところごと
を八重根とて其西小數十丈の巖と巖との間小渠の如く
入こみとところありてこの小木を横へ船を引き上
るく構へとあり是さきに路とて讀碑文小ある浮
田半平の開きとつふの處もやあし磯のよ地平
りて俗小高麗芝とつふ類の青莎種を敷きとる如
其上小一の丘の突起せり辨天山とつふ上は天妃の
祠あり故に名とて此より海を隔て小島ハ手に取まや
う近くらぬ小島といハ丈を大島とてとに對したる名

ありと南方海島志に云つり此島南北一里餘東西二十町をかり周回三里餘八丈より西二里にりて八丈の屬島あり宇津木島打とてニヶ村ありと云ふ南汎録に小島高亞西山嶄絶可愛鎖舟岩間踐棧而上凡百餘步始有民居東曰打木西曰鳥打邑無井泉唯資岩間涓滴とあり島のわきの突元とて見ても左もあつて思ふる同書小まゝに謁邑北鎮西廟診島記八郎還自琉球據有南海諸島承安三年為平家所攻自刎小島之壺谿谿今崩祝難識然環其地禁樵蕪呼曰神山鎮西被流猜虐愈甚發豎虎政覘鷲善射少忤其意輒投洋中其他材武手刃殆盡其不得良死宜矣とい

り按まゝに為朝の自裁に保元物語小嘉應二年とせりこま小照もときい承安三年四年後あり是頗る異聞とてまゝに發豎虎政の事古き史書小見る所ありまこと所謂島記といひなる人のいつ頃書きたるものありや島にわゝる所を見らに由あるを憾ある此為朝の祠の事に付て諸書小記にみる所もありとおの程に踏まざる地のあるれを愛ふといふを八丈の屬島に此外にあり青の島といふあり是に八丈より南のりて十八里ありと南方海島志に青の島東西二里餘南北一里餘隸八丈古名鬼島と見えり按まゝに大日本史為朝の傳小偶見海上鷲

飛意其有島航海一晝夜遂得至一島傳言為鬼島為朝威服
 土人名島曰葦島とある是ありて然きこと青の島ハ
 丈より肉眼よりよく其容を見ることを得き何と驚の
 飛を待て初然て其島あることを知るに及まんやごと
 参考保元物語小京師本杉原本より其後小三年小一度船
 を渡し鬼島年貢として織り絹百匹納むとあるよ見え
 ことハ為朝の頃小早くと絹織りゆるよやいん此青
 う島も噴火の災ありけりよ南汎録小此島天明時火發
 池中闔島徙居八丈通有次郎大夫者種人墾開今茲始請納
 歲租とありも其間五十年と云とい無人島ありと見え

よりかくて濱邊を逍遙ちりうち暮近くありとて寺小
 返る小寺僧茶を薦然て是ハ矢鏃泉の水を汲て用ゆる
 なりとて馳走ありとてさし出せ水ハいり少と清きや
 に覺えより矢鏃泉とい為朝の矢鏃めて穿ちありと云り
 湧き出る水にて泉を寺より遠くさる所小あると云ふ

丹香樓圖書

№1779/87

伊豆島巡視日録

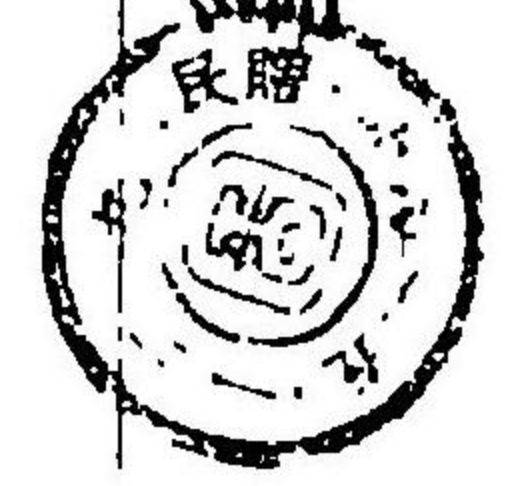
四 附緒餘

天
香
樓
圖
書

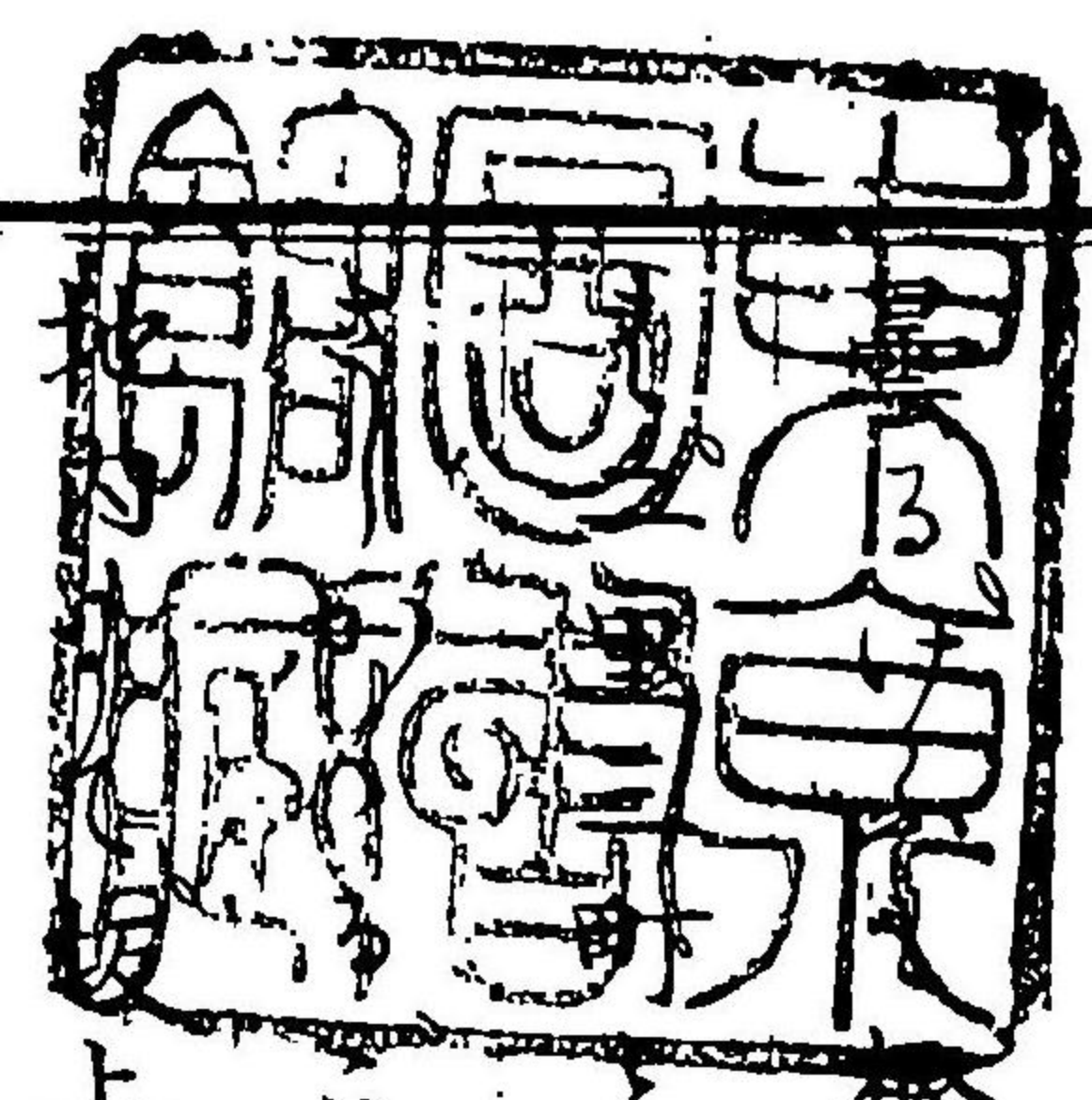
天
香
樓
圖
書

伊豆島巡視日録卷四

竹中邦香編



十日



怪立村小至らんとて大賀郷を出立つ其行程
といふ東南小向ひ村を出るるれい坂路小
うゝを大坂といふ八丈誌小大坂い大賀郷の
上三ヶ村への街道あり峠をホツキリと云ふ
島中一の大坂ありなと見えよとも今ハ新道をゆく
さのみ峻い坂の中りと右のく海邊小のそみ

一つの丘の上のかさ、少く平々あるを見下す相傳へて、為朝の城を構ふへいと定免られし所とて城山といふ。又横麻原ともいふ嶺を踏まひ、櫻立の支村ありて是より路平坦あり、數町にして、櫻立の本村小入る、本支村を合せて戸數百九十一、人口千百九十九ありて、男五百六十三、女六百三十六、田圃百三十九町餘、民は農桑を専らにして、漁業を為さず、故小畜牛の數は二百四十一頭小及ふも、漁船を多く一艘ありのみ、鹽を焼くも例の迂拙ある方法あり、さきとも昨年得たるとうろ、四十五石ありしとて、村中いづる所、笈をうけて水を引くこと、蜘蛛の巢の如し、ととい、溪

水を遠く汲むに通ひり、明治十三年初免て笈を設け、今、櫻立中之郷、末吉の三村とも、さき此の如く、大小勞を省けりといふ、村より十町あり、上の山小白瀧といふありて、そこに硫黄出ると聞きり、見小ゆる白瀧、溪を夾んで兩山、つゞく迫りたる、其上より落つ、上層は長さ八九丈、下層は四五丈あり、幅は僅小二尺あり、り小過きを、水源は三原山の頂より出て、是より甚く遠く、すといふ、瀑のわき、さきの山も皆硫黄にして、其色淡褐、打ていづや、よく碎く、其下小家をたうりうけたるあり、是は近頃、相州浦賀の人、高見澤八五郎といふもの、此硫黄を採らん

として借區を願ひ出官のゆるぎを得た。其機械を据ゑ
付んとて斯くいふのぢる。此れと神湊とて何やらん
鐵製の機械やうのそのく濱邊小ありしを見たる。爰小
据んとするそのありし聞く所にて、此山の土塊百中
の六十は純硫黄ありと然とも今見る所にて、混和物
あり是より多かりんかと疑はる。歸るさい、溪小をひ岨
はさひの樵路を下る所々に池塘あり、水を湛して灌漑の
たよりとを田にかゝる山腹あり。一面々々小級をあり、
勢ひ石磴の如く、さく地の下層に、さか岩あり故小周りに
石を積り疊むる事の事を小及こて是頗る便あり。

役場の帳簿に、水田六町五畝十九歩とあれとも、今見渡
すにけりても五六町歩にありしと思はる。目の及らざる
所小ありありありありけり。其數必しも帳簿の如く小
いありありあり。村小返りて、篠本彌太郎といふその家
小宿る。此夕雨至る。

十一日

雨を冒して中之郷小至る。世間の海邊小温泉ありし。聞
きしに、其やうを尋ぬるに、波打際の岩間より湧き出る
そのより、是も三宅島のその小同く満潮も潮小混し。
浴し難きよなるに、潮時ありしを往き見

坂上三ヶ村うての甲たりと云ふ村の東、潮間浦といふありて、魚介海藻多しと聞き、是を午餐の後、このわゆる村より四五町にして、徑路小入る小路甚くよか、上りて下る處最も峻く時小雨、藤をほく、如く岩滑らかりて脚を失、易く頗る歩みあやまら、下りたる所、磯邊幅十町あり、間岩少く、砂細やうにして、引網おも、用ひ得ら、きさは小見、たゞ灣形を為さる、故小船を泊、難き、遺憾あり、濱邊を拾ひ得たるもの、ウミヅル、イソアヒ、モタテ、海肥、其他をく、あれと頗、い、け、と一々記さす、海肥、俗よ、子安貝とて、

小笠原島小産するもの、大なるものもあ、こと數を多し、中よ、三寸許のものあり、漁する魚のあり、ま、を聞くに、文鰻魚トビウナを最も、鱈シヤウカシマ、いと、夥、かり、が、近來、岸へ近づくもの少くありて、多く、獲か、鰹魚、從來牛の角、て釣、り、とも、多、う、を、今年、て、先、て、伊豆の、この來り、網を、試、う、ん、と、て、準備中、ある、とも、いま、網を、下、を、小、至、らす、と、云、ふ、此、餘、漁、期、の、定、まり、たる、もの、を、左、小、列、記、す、ま、つ、夏、に、

赤魚 此魚、伊豆日記小形か、さ、こと、し、る、魚、小、似、て、色、真、小、紅、あり、赤、き、魚、多、け、し、も、あ、り、あ、ま、い、

まといふたういふありき。海底小珊瑚ありて化して魚とありたる山やま。戯まぬ身いと白く味いとやういふとある。是あり。

夕ヒ 同一記小黒鯛小似て異あり。あつら多く臭いありとあるものなり。

ハロウ 是ハ海島風土記小圖を載せて形どうりこ小似て色違ひ味小く劣るとあり。

モロコ 同一記小圖ありて遙の沖小て釣る。口至て巨ひりて鋸齒頭大あり。丈三尺許味鯛より大味にしてこいといふとある。是あり。

サビレ 是ハ秋八月頃より来る魚あり。南方海島志ハ磯小て釣る。形ハまち小似たり。然まとも味も國地の鯨小等。數十年経て是の如き。長二尺四五寸餘。稀小三尺ありとの魚ありと云り。

シヨナクチ

ハトヨ

アミサ

カリキヌ

此四魚ハ何の書小も名見えを圖もあけしハ現物を見せしハ状知りか。

まゝ冬の漁也。

サ、ウヲ 是ハ、伊豆日記、南方海島志、ともに圖ありて、海島志小、十月より正月まで、らん葉とつゝ藻餅を餌と、糸三四十尋を以て、磯より釣る。形黒鯛小似て、油深し、臭氣あり、大あゝを「ヘラツタヒ」小きを「オバクロ」又血渡と云ふ、卅魚小、菜、大根、雜穀を入き、煮て食む、冬、春、民家の助けとあると云つり。

カシカミ 海島志小、季、春より夏へうけ、らん葉とつゝ藻草を餌とて、沖より釣る。魚のうけ一尺二三寸、異形あり、油ふく味かるく、干魚とあるとあり、然るに、今

漁人の言を聞くに、甚し異形とも思ふれを、内地「フタヒ」といふとの類と思はる。季節も、冬より春へうけてありと云ふ。

季節定まりあるもの也。

鰯魚 夏冬に論多く、時々て、大小羣をありて来ることあり、網の設けある故小、多く「とり得」といふ。ナダ 是ハ、海鰻の類あり、南方海島志小、形鰻小似て、鋸齒、紫黒の斑紋あり、長三尺餘、油うま、味かりし。日小干して貯ふとあり、ハ丈誌「ハ大あゝハ六七尺小及び、虎斑の如きものありて、齒うま、く勢ひ烈し。

磯少て釣る。大あまハ水をとるあきて。人小向ふ勢ひあり。是を喰ふに味輕くして小骨多しとあり。今漁人の言を聞くと六七尺のさのく如きハ極りて稀ありと云ふ。

鳥賊 鯉魚を釣るとき鳥賊ハうつをに逐きて波つゝ浮き上り船をとる巻くわとの事もありとて其状を聞くにやういりといふさのく推さ小似たり島民未だ釣ることには熟せざるを以て獲ること多うさる。

章魚 足長く一尺四五寸乃至二尺許のさの多し。

鯖 夥しく羣を為して來ることもあるとも年々季節

小異同ありまじく少くも來らざる年もありと云ふ。

鰆 是ね小あり。中も殊に長大あるさのもあるよし。

クマノミ 是ハ海島志小夏磯まで釣る。色青黛の如く。

異形ある魚あり。丈一尺二三寸。身和らかりて味平

ありといひ。八丈誌小むらめの魚小。其味似たりとい

へり。去きとも漁期ハ夏にも限らざるよし。島人ハい

へり。

カテウ 海島志小磯まで釣る。油少く身和く大味あり。

色赤く鱗小黑点あり。丈二尺四五寸に至るとあり。

以上もくして現物を見よるにあつた福ハ風を攫む如く又影を捕ある如く小をあれと姑くその目をあけて後の調査をまづのみ此他アブキコナカレハ殊小多し鮫ハ各種あり就中カツヲサメツノサメハサメツコサメとツム多きトツノサメハサメツコサメハ捕りて油を煎取り燈料とも江豚ハ時々大小羣をあつて来れともいま捕りーことあきよし鯨も往々見ることあれとも固より捕るへくもあきよし又海島志小ソくるテイマスノウラシヤケヲウノセラシマダカトダシヤコスダウラクサイハ誌小ヲコシとハ八丈誌小ソくるフツチヲダウラチキリトあるハ是あり

ミハナタレツカ子イワシ等の類ミふあれとも専らにこを捕るといふものそのいあきよしあり海藻ハハンバ則ち内地よてハバノリといふもの及びサイミの類あり雲丹ハ方言イラカジといひ磯際小多くありまた小蟹の一種ありガリマといひ其や大あきよしソコガリマといふ右八丈島海産の大概なり其うちアブキハ中之郷を最とて近ごろ村民申合せ捕るに季節を定め蕃息小害あつてむむことなせし殊小嘉尚をへきなり觀畢りて原路を取り宿小ソくるさてもおのし曾て國文社小まづりしとき工場小ソはひぬる未子三とよふ

ありけり。八丈島のとのありけり。去る明治十五年の頃
もやありけん。養父の島あり。つゞく老い。侍養
せん。先にとて。いと後をひき。やうて放ち遣りぬ。其
頃。年も。ちか。なり。が。世との今。いり。に。は。を
と。村人小問へ。い。ぞ。此村の。と。と。名主。う。り。菊池某とい
ふ。その。養子。して。今。成長。して。子。までも。攀。け。健。や。り。に
て。村。小。あり。とい。ふ。を。き。い。と。て。名。刺。を。り。せ。や。り。け
る。に。な。り。て。尋。ね。来。り。ぬ。つ。き。も。さ。て。つ。つ。や。り。東。京
を。い。と。ま。せ。し。ま。い。再。ひ。東。京。よ。出。ん。こと。いつの年にあ
る。一。も。定。め。し。り。れ。も。又。あ。る。え。や。こ。も。お。か。り。く

子かとおもひ。いと哀し。う。覺。え。が。圖。ら。き。と。か。り。島
小。こ。も。せ。ぬ。ひ。恙。ま。は。さ。ぬ。あ。ん。さ。ゆ。を。見。参。ら。す。事。の
う。ま。い。き。よ。し。と。悦。み。こと。限。り。な。し。思。ひ。設。け。ぬ。こ。も。あ。し
も。何。も。奉。り。き。も。い。も。す。せ。り。て。も。の。事。に。と。て。齋。ら。し
ぬ。と。て。雞。卵。數。十。を。さ。り。出。す。を。夫。を。下。物。と。て。東。京。よ。り
ど。ち。来。り。酒。う。み。か。も。た。ら。い。と。快。か。り。き。何。う。れ。と
語。ら。ふ。う。ち。島。の。草。木。の。事。い。ひ。出。す。と。い。き。い。彼。り。庭。小
あ。る。ッ。口。小。ま。と。シ。ダ。小。ま。し。参。ら。せん。とい。ふ。此。ソ。ロ。と。い。
木。の。つ。つ。ち。椶。櫚。小。似。て。太。く。葉。も。ま。ま。椶。櫚。の。如。く。あ。る。と
も。廣。く。し。て。大。あり。毛。を。生。え。る。こと。少。く。木。肌。小。あり。ち。く

して滑らくなり。圍ひ三尺もかり。長け三丈もかりに及ぶ
このあり。海島志小。季夏花さく。實ハ初冬。小熟也。島人其用
を知らず。實を碎き試る。小麵粉あり云々とつふとの。是か
リ。シタハ。うら小三宅島の。樂師堂の前小あり。このあり。
但し此島ハ。三宅島よりも多くありて。且大ありと云ふ地
の暖み。に由るな。く。おのれ。シタを求めけ。さ
らハ三根村の宿まで。と。せ。参ら。と。約。夜も更け
と。返り去ぬ。

十二日

いさく陰り。と。雨ハを。や。と。朝。と。未子三来りて。

村の東南小藍^{ア#}江^エとつふ處あり。此村への船を繫ぐ。一
き地あり。見ゆ。と。つふ。と。伴ひてゆく。巖石高
く。崎ちた。南の。出。更。小東へ向て。蜿蜒と
こと數十間。其内小海を擁。東南あり。岩戸の鼻の岬角と。
相向て灣形を。灣内の岸に近き。一ハ巨巖海面
小突起也。是を龍柱と稱す。風あり。船の綱を。一
方ハ龍柱小繫き。一方ハ岸小繫け。風濤を避く。一
い。岸甚く高く。物を揚卸するに。便あり。文字ハ
と。南汎録。ハ。掲。龍柱二字。と。今ハ。文字ハ
見え。此地ハ。八丈島八景の一にして。落雁を以て稱せらる

るゆいふ。所謂八景ハ。小畑夜雨。洞窪澤秋月。大坂夕照。神島
歸帆。八重ハチヘ漢コト晴嵐。富士暮雪。崇福晚鐘。及ヒ此地ノ落雁アリあり
とて。何人ノ撰ヒ所アルを知らせんとし。とも強て西湖
八勝ノ題目小擬シたるものにして。此地必しも落雁を以
て稱スきくべき處ハあり。若シ夫レ題目小拘ラる
ことおろん。たのことも。落雁小代ルに。飛燕を以てせん
欲スも多クなり。其故ハ。此ハあり。石燕イシヅメ多く。其數幾百トモ幾千
とも。測リ知らせぬ。盤旋頑頑シて。或ハ高く。或ハ低く。乍
ち近く。乍ち遠く。一往一來端端倪一かゞ目をせぬ。か
り。をうけけいあり。此石燕ハ。ほねのほめあり。形大

にして。腹すて黒シ。日光山ノ華嚴ノ瀑ありりに居るもの
小似テ。や。少ク異アリ。いつこの處ハ。巢をらふものあり
や。さえて見しものなり。若シよく巢を探リ得テ。博物家小
報ハい。定めて重賞を得ることあり。閑事ハさて措き。
形勢前小ハ。一つる如くなり。若シ島人ハ。他日江豚を捕
ることを企むものあり。此處ハ。うへり。うへり。けいさ
て爰して。末子三小別れ。宿小返リ。午飯の後。末吉村小向ふ。
行程一里十四町と云ふ。其間小。二つ三つ坂あり。甚ハ
峻ハ。末吉ノ地内小。八景中ノ一なり。洞窪澤ありて。
海濱ノ灣形をあらる所あり。聞きか。雨ま。至

りぬき往うと末吉村ハ峰巒重疊せる間小ありて東隣より西隣小つるに坂一つをうえさくくさるあり南隣より北隣小ゆくに谷一つを隔ゆるあり其相並ふ家もても甲家の柱礎ハ乙家の棟上小あり村路迂回多く頗る迷ひ易し戸數百六十五人口九百九十八名其内男四百八十二女五百十六にして畜牛二百四十六頭ありまよよく農桑をほとの織物の如きハ其精良敢て中之郷小讓らんと云ふ漁船ハ五艘あきとも捕るるところ多きものハアブキ小止まる昨年の收穫八萬一千個小上り海藻ハサイミ石花菜のみありけハハ村役場にて東京府より差遣の

醫員種痘を施すとて村民の稚きものをもほくくハ其雜運大くありて依て按をたに伊豆七島記小此島痘瘡を恐る事甚しとかき流行の時ハ一人も助命をりとのなきさハハ痘瘡人あきハ別小家をほりてそこ小移しやしく病人多くあきハけをさる大なる家をあげて病人をたしくとこ小やり流人のいやしきものに米或ハハ細などを典へて病人の看護をよみ其者小仕せざるのみにて親子兄弟としくもつ小よりはうと看病する人も時小臨きて頼まはるものも他人ありましてや二十人三十人の病者を二人三人の者

にて取扱ふ事^もて、藥^もて^も、大^うみ小^こ煎^して、用^わる^ふか
き^い、何^な事^も届^とく^も、誠^{まこと}小^こあ^まれ^る体^{てい}あり、云^い々^とあ^まる^もを
見^みて^も、昔^{むかし}の^さゆ^思ひ^やる^る、然^{しか}る^に今^{いま}、斯^{かく}官^{くわん}より^こと
き^きに^に醫^い員^{いん}を^きり^り下^{くだ}さ^せ、島^{しま}々^とに種^{しゅ}痘^とを^しえ^せ、れ^は是^{こゝ}に
く^く先^ま小^こ死^しを^さる^る、さ^のも^もあ^く、生^{せい}涯^{えい}を^こ心^{こゝろ}安^{やす}く^過る^事、誠^{まこと}小^こ有^あり
難^{がた}き^事あり^か、是^{こゝ}より^三根^{こん}村^{むら}小^こ歸^{かへ}ら^んと^て、末^{すえ}吉^{きち}村^{むら}を^出
る^こ、其^{その}路^ぢこ^とに^嶮一^{いち}里^り半^{はん}許^この間^ま、小^こ三^{さん}四^し丁^{てい}ま^ま、こ^こに^七八
町^{まち}あ^まく^き、上^あり^坂六^むつ^つつ^とあり^て、其^{その}上^あり^は、危^ある^る所^{ところ}、
三^{さん}原^{げん}山^{さん}の^山脈^{みやく}、坂^{さか}上^{のぼり}と^坂下^{くだり}と^を、^から^きり^たる[、]其^{その}間^まの^絶頂^{てい}
あり、此^{この}山^{さん}脈^{みやく}、島^{しま}の^南端^{なんたん}より^北端^{きたん}まで^立列^りあり^て、こ^こを

東^{とう}山^{さん}と^泛稱^{しょう}を、三^{さん}原^{げん}山^{さん}、其^{その}最^もも^高き^峰、路^ぢより^北小^こ隔^{かく}
より^て見^みゆ、是^{こゝ}より^三根^{こん}村^{むら}まで^の間^ま、少^{すこ}しの^上り^もあ^く、
さ^の下^{くだ}りに^下る[、]其^{その}坂^{さか}頗^おる^急に^{して}、一^{いち}里^り餘^りの^長さ^あま^い、
三^{さん}根^{こん}の^つつ^{より}上^あら^んよ^い、歩^ある^こあ^まゆ^む所^{ところ}あ^まく[、]坂^{さか}の
名^なを^い、登^{のぼ}龍^{りゆう}と^いふ、此^{この}ち^ちま^まか^らの^山小^こ椿^{つばき}を^植付^ける^を
見^みる^に、林^{りん}の^間の^雑草^{ざくそう}を^い、盡^つく^除き^去り^て、清^{きよ}ら^くなる^洗
る^る、如^{ごと}く、島^{しま}民^{たみ}の^椿を^愛護^ごする^至ま^りと^謂ふ[、]坂^{さか}を
下^{くだ}り^る、如^{ごと}く、田^{でん}圃^ぼの^間を^過く^地の^字を^小畑^{はたけ}と^いふ、即^{すな}ち^八
景^{けい}中^{ちゆう}、夜^や雨^{あめ}を^以て^聞え^る所^{ところ}あり、三^{さん}根^{こん}村^{むら}小^こ入^いら^んと^をら
こ^ころ^に、小^こき^川あり、加^か茂^{しげ}川^{がわ}と^稱を[、]さ^のこ^ころ^に、き^名あ

ま、之を問ふ小此川の水、清冽にして、且早魃すと涸る
る、とあけま、三根の閩村、汲て飲料とあま、とつり、又
此水源小瀑布ありて、奇觀ある、と、と、ふ、雨中の
ぬ、り、ちをた、り、脚や、疲、れ、を、路を、枉、る、に、及
ま、り、て、直、ちに、三根村の宿、小、り、著、く、末、吉、の、行
程、凡、三里、餘、あり、と、云、ふ、是、より、五村を、一、周、り、畢、り、た、れ、を、
更、小、全、島の、戸、口、を、通、算、ま、る、に、戸、數、ハ、千、四、百、六、十、九、と、て、
人、口、ハ、八、千、五、百、六、十、四、此、内、男、三、千、九、百、八、十、六、女、四、千、五、
百、七、十、八、と、を、按、ま、る、に、安、永、甲、午、の、書、上、ハ、戸、六、百、八、十、
八、口、五、千、三、百、八、十、七、と、見、之、是、小、比、ま、ま、ハ、戸、ハ、七、百、八、十

一、口、ハ、三、千、百、七、十、七、を、増、し、た、る、計、算、ま、る、と、も、明、治、七、年
刊、行、の、日、本、地、誌、提、要、小、戸、數、一、千、五、百、八、十、六、戸、人、口、九、千、
四、百、二、十、三、人、と、あ、る、に、照、せ、ハ、戸、ハ、四、百、十、七、口、ハ、八、百、九、
十、九、を、減、し、た、り、と、も、是、甚、く、怪、む、事、ま、る、と、も、い、ま、る、
其、理、由、を、考、へ、得、ま、る、

十三日

晴、く、ふ、く、西、山、小、登、ら、ん、と、て、助、三、郎、を、伴、ひ、て、出、つ、西、山、を、
本、名、甕、峰、と、し、ふ、煙、立、つ、こ、と、甕、の、物、を、蒸、ま、り、如、く、な、る、
より、名、は、く、一、名、香、爐、山、と、南、方、海、島、志、ハ、り、り、を、
望、む、小、八、面、向、背、ふ、く、真、小、八、丈、富、士、の、名、小、負、と、て、村、を、出

て七八町ゆけと足指漸く仰く次第小上まゝ路小當りて。欄を設けつり蓋一山上小放牧する牛の下り至るを防くなり。こまをこえてお不數町上まゝテフツメシラ手水平とつふ所あり。ほとりに小祠あり助三郎袂タテ身洗米をとり出りおのこ小興ふ其故を問へ祠小賽まゝとあり其言小從へも彼もまゝ米を散してゆく土俗西山小登るその必を斯くまゝ習ひありとを又數町上まゝ日ヒ臺とつふ所あり此あつりつり地小唯赤揚ベニハキのよけ低きものと雜草とを生まざるめとお不上まゝ赤揚とまゝて焼石の間小僅小雜草を見る所々小野牛の羣をありて徜徉するあり聲を高く

て喚へ駭きて走り去る其矯捷あること牛とい思をまざるなりあり皆よく肥大小して中より洋種ヨウシュと雜種とたばきタバキきとも見えつり上り盡せ巔小大ある窪フツありりて城のうら壕のさゆ小似たり東南のうらを大穴といひ五六町をかりの長さなまゝ西北のうらに小穴あり圓く深くして播盆の底を覗ふ如く徑り百間をかりもあましく見ゆ大穴小穴ともに噴火のあとあり其上小別一邱あり是蓋一最高の處あり日本地誌提要小據とい直立二千八百四十六尺餘周回凡七里餘全島三分の一小居るとあり又山巔常に火を噴きとあれとも今

いさゝ事あり大穴と小穴との間小祠あり何の神を祀るを知らず惟ふに島民むら山の噴火せしとき之を神と斯くい祭り初しあらん噴火の事を按るに南方海島志小永正中地忽燃出而成山慶長十年十二月十五日復燃突然為高山す山燃の事神火と申傳ふ慶安十年とも古來より三度燃ゆとあり八丈誌小い年代記を引て長享元丁未年十一月十三日夜火吹き出を隨て島中甚よ饑饉又永正十五戊寅年正月火吹出五年續て焼る又大永二年より翌三年まで火強く吹出富士焼上り煙人家へかうり麥蠶多く損をとりあり是小よき山の焼けしことい

古來五度と見えたり然るに今小穴の口より底まで黄楊の林をなして盛小成木せり羽倉氏の評して蓋外枯而中潤者也といふれいさ事してかゝる噴火の跡小かうる樹木の成長もろこと亦一奇と謂ふしかこ徘徊をららし俄小風起り雲出て見るくあらりに立ちこる遠望もろことを得たり惜りき八丈島筆記小此山の谷小白糸の瀧あり風景の地あり三河口氏い
此島の海さく見えぬ山の奥小ありとい誰の白糸の瀧とよまし見えぬいそ見んとてさらく尋

福一と助三郎も来りしことなりとい路を知らず終小
 尋ねてひて山の南をたぐり麓小下る。世間鳳尾蕉多一方
 言谷渡りといふ大あるものも葉の長さ四尺餘小及ふ蒼
 翠愛多く午後一時頃宿小入り午餐を食ふ。た草の烹
 煮を食ふ小脆くして芳い。莖は松を食ふ如く根
 小胡蘿蔔を食ふに似たり。世草七島にふあり。いふ
 おのれ大島少ても食ひしりと世島のものく肥大あるに
 及まず。海島志小鹹草夕小根を食し朝小葉を食する故あ
 べと云ふ。世草島の方言あり。又あつと多く種を時
 き根葉とも飯小糲せ。或ひは菜蔬として食して一年

あるを。小花鹹と云。三年を経て花咲き實め。是を三年鹹
 と云。莖高さ四尺餘根太さ五六寸長さ尺餘。三年を過ぎハ
 筋立ち食むるに堪む。根味甘く苦を帯ふ。氣香く去々本
 草綱目鹽麩子附録小も出つ。今諸州小も種う。豆州南方小
 山野にもあり。島より来るなりと見えたり。福羽氏の巡
 回報告小其形山防風小似たり。種子を播きて能く生む。冬
 を経て枯ることなく。春小至りて蕃茂む。而して一根數莖
 を抽き。每莖二三枝を分ち。枝上小各三葉を著く。葉の形山
 防風の如くにして潤大葉頭三尖ありて四邊小鋸齒あり。
 初め種子を下り。而して苗を生む。三年にして七八

月の際、葉中一莖を抜き、高さ三四尺、梢上碎白花を開く、攢
簇して傘の如し。八九月種子を收斂、十一月之を播く。島民
其葉を採りて之を食ふ。其根、鹽水を以て煮過し、皮を去
りて食料とす。又根莖、之を細割して、麥小和し、粥とあ
て糧とす。又豆州諸島物産圖説小據に、八丈島の里人云
ふ、朝草、味美ありとす。若し過食し、之小重ぬるに、其
身を向陽の地小勞むとす。輒ち身體麻痺して、精神恍惚と
り。是故小味美にして、且饑を濟ふとす。過食するこ
とを得ず。或云、八丈島の俗、常小此草を食ふ。故小其人、痘瘡
の病ひ無しと。未だ其然る所以を知らず。又曰く、此草、二種

あり。一種は、葉莖青色あるとの、其根大にして、甘味多し。之
をあいたと云ひ。一種は、葉莖紫褐色あるとの、其根小に
て、苦味多し。之を山阿しと云ふ。一小野ありたと名づく。
其ありたは、衆人皆根葉ともに食ふ。野ありたは、或は葉を
食て根を食ふと。或は根を食ひて葉を食ふと。其苦味多し
り故小、人々の好惡小依て然り。云々と見えたり。之を助三
郎小質とす。大抵差ふところなり。たぐ之を食ふら故小、痘
を病むとす。いふの一事は、島民攀けて、今其妄説あるを
信せらるるの如し。今おのころ食ふところは、單小ありた
とよふものなりとす。此草を食ふこと、年久しき事

のよーして。

おまふくを行末まをれり。草ぬもまろ人のりん
かきりはと為朝のよはま。とて島人今にもいひとてを
や。ま。伊豆日記。其他の書にとかきり。伊豆日記小い。
此島ゆ。より五穀乏しく。鹹草といふ物を常の食と
まろ故小。大。瘠せか。とろく云々。凡十人の食小。麥三
四合を煮たくら。湯の如くなりたる中へ。あ。た草を。
さまに。きき入。潮水あ。い。るん。いと。いふ物を。うち入
て。ろ。云々。かの十人小三四合。かりの麥あ。い。た。鹹
草の。い。て。麥。有る。り。あ。き。りに見ゆ。是を雜水といふ。

島人のけ祿の食。い。て。飯。と。ま。て。ろ。事。なり。て。ろ。に
あ。ち。い。見。る。に。え。も。あ。ま。ぬ。に。あ。ひ。て。ろ。口。と。の。ん。と
を。と。り。す。り。と。見。え。又。三。河。口。氏。

島人のいのちをまろあ。い。さ。り。ゆ。の。煙
と。ろ。あり。と。ま。れ。と。バ。丈。誌。い。え。れ。と。今。甘
藨。を。多。く。け。り。て。を。け。祿。の。食。に。ま。芋。を。食。
い。必。鹹。草。を。た。い。む。い。あ。ま。ま。助。三。郎。い。つ。り。た。
の。ま。惟。ふ。小。三。河。口。氏。の。島。小。り。寛。政。の。頃。い。い。海
と。甘。藨。を。種。え。さ。り。故。さ。も。あり。に。や。甘。藨。を。初。免。て。種
え。い。大。賀。郷。の。菊。池。右。馬。之。助。と。い。ふ。の。な。ま。其。年

代定かある福と蓋寛政より後な多く一然るに羽倉
氏の渡り天保年中小至りて、早くと甘藷を多く種ろ
ことくなりて味もよかりけりよや南汎録小食芋魁風味
絶佳予以薯蕷甘藷芋魁為八丈三珍の語あり依て晚餐小
をいつとを食せよと命しるに、ゆへに果してこそ
をきくむ甘藷いそのゆへに皮あひら食ふ小過
きを東京の市俗甘藷を八里半とつふい栗は少く及を
まとの謎あるが、此島のどの水多きと軟か小過ぎ
甘味も薄く川越種あんとも遠く及まき七里半とい
ちんのみいとい俗小やつらとつふとのときあつ

きとつふとの二様を出さぬうつきい味佳あき
と皮のまく煮たるあきに至てらひにややつら
も皮のまく切りて煮たるあきとも皮薄くしてげんと小
うらまを甚いゆへ薯蕷あくる朝とろになりたる
を食ひ小是まに頗る佳ありきて食うのみせに因
伊豆日記小やくかたまあたあぢみまとい小物又海の
藻いろく取て潮水をとて煮て食とも又んごとして根
ハ芋の如くなるものを山より取り来りてよく煮て白小
入と搗きて餅の如くちひきくまらりて口になけらみ
丸のまにをるごと歯小あつまいからく急くきにえを

かとありしを思ひ出てさるるのや食ふかと助三郎小尋
 むるにやくふへんこふとい今食ふとの稀ありなはあ
 しいとい野ありとの事なきく薊アザミ一種刺なくして莖
 葉和らくなるとの山野小自生をこまをとり味噌汁小入
 きて食ふに味ありうぬとのなりと答ふおのれ曾て越
 中の立山小上りるとき頂上の室堂にて薊の味噌汁を食
 ひ味よく覚えしことあり或り同し種類あるり然れとと
 彼ハ寒國の殊小高山の絶頂小生し是ハ極暖の地の野小
 自生もことあやむし又此薊の事本朝食鑑大和本草
 本草啟蒙等の書小見えを野必大貝原損軒小野蘭山等

の諸老輩ハ知らざりしはや是もまことあやむし潮水
 けて煮るとあるとの今ハ多く味曾とて煮る島ハ醬
 油ありいより何れも味噌のういさごととて煮るより醋
 もはくつを柚橙等を搾りて用ぬ柚橙九年母柑子の類ハ
 よく成長を家ことハ二三本ハ裁てあり酒をなましくて
 甘藷とてはくりたる焼酎を飲む是も大抵家々小はくつ
 淡薄にして泡盛の如く強うき少く甘くさき臭
 ひあり是ハ皮を去らさるる故小斯く甚くあらん馬鈴
 薯にてはくりらん小ち此はひ薄くさきにいら小
 ちやと問ハ島ハ未馬鈴薯を種えとと答ふ又鹹草

の根にても、焼酎をほろろ甘藷よりも上品ありと云ふ序
小産出物の、りくまを聞くに、穀類ハ、米、糯米、大麥、小麥、大
豆、粟、小豆、裸麥、稗、蜀黍、玉蜀黍、蠶豆、豌豆、大角豆、扁豆等、蔬菜
ハ、菜菔、胡蘿蔔、蕪菁、里芋、甘藷、薯蕷、蓮芋、牛蒡、百合、零餘子、筍、
款冬、蕨、茄子、胡瓜、瓜、生姜、蕃椒、紫蘇、芹、蒟蒻、葱、土薤、十六豆、
英、隱元、蓬、蕪荷等、果實類ハ、椎實、椿實、柿、枇杷、柘榴、蜜柑、九
年母、橙、楊梅等、菌茸ハ、椎茸、初茸、木耳等、製造食品ハ、焼酎、味
噌、鹽、豆腐、麩、大根の切干、甘藷の切干、澤庵漬、薤漬、鰹魚の志
ほらら、其外煙草もあり、茶も少しい製もと云ふ、尚此餘小
ぐみ、あけび、いちご、いちじく、むぐの類、児童のとりて食ふ

不といあ、く見ゆ、但、梅ハ曾て無、故小島民梅け
を知らず、おのれとて、せ、そのを、宿の家人小共、
小、甚、珍重せり、又或る書小島、い、茄子の年を経て、大木
とありたるありて、楷子をうけ、實を採る、これ圖を出し、
蕃椒も、大木とありて、家の床柱おとに、用ゐ得らる、
いひ、さる、が、い、り、少と、茄子も、蕃椒も、其ま、くに、置け、冬も
枯きを、年を経、きと、と、年を経て、こ、けり、よ、き、ふも、あ、る、
誰しも、冬、ハ、刈り取る故、さ、せ、る、大木、ハ、い、る、事、な、と、云、ふ、
此夜風雨大小至る。

十四日

曉くより北風まきくつくと雨こまに加ちり家もゆるき大木も折れんかと思ふをかりしと雨戸明ることさへ叶ふ事さきともあすい船の迎へ小来るへき期日あまいとて行李とり收めおとさるにやうて是もさきつりさて為さるき事もなく退屈しるさき伊豆日記と海島風土記とを取り出し島の風俗古今の異同をかの助三郎小ただもまの伊豆日記小島中一萬をうりれ人なるが盲人とて一人もあし中風癩風いとまれありとあり虚實いりにと問ふに今い島小盲人二人あり其一人い生さあかりのういひりて一人い山小入りて過ちて物よて目をつき

志ひさるなり病て盲ひさるそのさあさ中風い甚い稀あり絶て無いといひ難い癩風いとえて無きり如し然れとと島人小バクと稱する病往々あり小島い殊小多し病むそのい大抵婦人あるが脚い腫まふとり生來の太さの倍小といさるそのあり是此島の一種の風土病て此病は罹きい不治のそのとていさる歎くありといふ昔の他屋の餘習やあると尋ぬるに其事今い地を拂へりといふ深山小天兒といふ物ありて人を誑らかり悩まるといふ事ありやと問ふ小さる事ありと島いひ傳へいまれと現は誰だありとさるいといふものあるを

聞くもとつふ。白蟻とつふものありて、人の家をそこまふ。家小つきたるを知らずして、日を経まひ、柱小くひ入て、終小柱を喰ひ折るとつふ事ありやと問ふ。小此事今に依然とつふあり。此白蟻と野鼠とい、實小島中よその最も患ふるものにて、其中白蟻の家を傷ふ、常小意を注ぎ、けきりて見ると、速小謀をなせ、い、あ、蠹蝕を防ぎ得ることもあるとも、鼠の田圃を害するに至て、實小防く、つぎ術あり、若くよく防く、つぎ術あり、聞かまり、とつふ。猫を畜する、い、小とつふに、尋常畜ひ猫、野鼠、捕り得る、唯山猫も、つま、く、捕れとも、鼠よく地下を潜り、猫、地小入

ること能なき、故、多く、捕り得る、且鼠の數、極めて夥しき、小山猫の數、少け、い、い、と、い、之を捕ると、鼠の減るる、小々至らると云ふ、つて其山猫、い、南方海島志に、金花猫、土人呼、山猫、常居深山、時出魅人、頗為人害、寶曆初、檉立、村長、市郎衛門、以餌引之、設罟、捕得之、契奴、槌擊不死、便卷、以質墜、石、沉海、其形如象猫、而圓大、脚短、尾長、全身灰色、通尾長四尺、餘とある、このあ、い、ん、が、此山猫、小兒をとり食ふんとせし事、伊豆日記小見え、つり、今小も折々、か、ろ事ありやと問ふ、小山猫の人を害する、如き事、い、い、ま、聞か、去、ま、と、元來島、い、雞を畜ふ、小、こと、つ、小埒をほ、つ、契、さ

る。習ひあるは、雞、夜、小あき、園中の樹の上、小宿をくらぐ。
時、物、小喰ひ殺さる、事、狐狸の屬、鷹、鷲、鷹の類、居らざる、島、雞を捕るとの、恐らく、山
猫ありんと、思ふありと、去、牛、小角ありせさせて、勝負を
あ、ろ、事、年、小、盆の、小、小と問
ふ、小、此事、今、以て、同、已、小、一、昨日、末、吉、村、小、遊、ひ、を、催
し、東京府、其他の、諸、官員、を、承、り、ぬ、牛、ありせ
小、負、け、と、常、小、牛、を、よく、畜、ふ、故、小、昔、より
此事、を、設、け、ある、なり、と、云、島、人、女、を、こ、ひ、び、て、も、お、不
う、物、う、補、も、文、た、ら、事、い、せ、ち、ひ、き、く、は、り、た

る、草履、小、いろ、く、の、漆、糸、を、と、く、た、と、う、紙、小、包、こ、て、お、く
は、女、その、心、小、あ、さ、る、と、思、い、も、と、を、取、を、き、む、志、く、
か、さ、さ、い、其、ま、く、戻、を、と、あ、い、い、に、と、問、ふ、に、今、い、去
る、古、風、ある、事、汝、為、を、その、な、然、れ、と、も、そ、て、に、相、通、し、て
後、草履、よ、ま、れ、漆、糸、に、ま、れ、其、外、何、小、限、ら、を、如、小、お、ら、は
事、い、ある、に、聞、け、り、と、い、ふ、よ、き、家、の、女、房、等、木、の、皮
と、て、は、く、ら、一、つ、口、の、印、籠、を、提、け、其、紐、い、と、長、く、と、足
の、引、か、み、あ、ら、り、と、と、と、と、提、る、と、い、ふ、事
あり、や、と、問、ふ、に、昔、い、よ、る、事、も、あり、よ、し、僕、々、祖、母、ある
その、持、ら、し、この、今、ある、家、小、あり、と、と、取、り、出、し、ら、る、を

見ろ小表裏小鶴亀を彫り陽起ハ朱髹マして有りこみくる
所ハ黒漆マしてぬり古拙ハして面白キきものなり是ハ煙草
をいるハこのなりといふかハる問答カおぬるわとに
雨ハをよみて風ハをまきよく烈クくなきりあハるハれ翁入
り来り頻小眉ハうちひそえ今年ハの蠶ハちや是マすてよやあ
らんハいにさハるハちハあハるハよハて其故ハを聞くにハ世島
よハてかハる烈クき風あハきハ海より潮を吹き巻き来り其
潮水桑小かハきハ忽ち葉ハ周ミ枯れて蠶かふことなり
難ハしとあり實ハ世島ハ蠶を以て命ハとたのむことなきを
其憂ハめハることよりある然るに夕ハより風やハ和ら

まハるハ主の翁もハうハ心おちめハなハるハぐハふハの
風ハよハてハあハを迎ハへの船来ハるハとも思ハをさねと内地ハ
てハ風ハのやうハいハなるハしハりハ知ハりかハけハ色ハ必ハ来ハらハて
とも保ハち難ハらん今宵ハ名残ハの酒酌ハミヤさんハとてハさハえ
依ハ者ハとハのハてあハるハ持ハち来ハる折ハりハ世三根村ハの役場
よりハりハふハも牛を屠ハりハさハいハ分ハらハさハくハらハありハとて肉
數ハ介ハちハ来ハる東京ハを出ハりハよりこのかハと久ハく肉味ハを知
らハさハきハ心ハうハけハくハやハうハてハさハきハを食ハふハに肉ハ和ハらかに
いあハきハと味ハうハそハ牧草ハの品種ハ宜ハかハさハるハ故ハやあ
らんハ関澤ハいハ東京ハより齋ハらハせハ罐詰ハさハくハ取り出

さる。其品も、鰻魚の姜汁、鯉魚及び青串魚の草麻子油、又ハ
落花生油にて、製したるものにて、皆水産局試験所にて試
小製造せられたるものあり、おの程旨いと稱して、饗饗六七分
小及ひるとき、品評いかにとあるものと、去せんとよ、鰻魚の
姜汁ハ、脂膩濃きに過ぎ、之を食ふて後、口中黏氣を生じらる
こと甚し、未だ以て至美とせしむるも、鯉魚、青串魚ハ、骨硬
く、肉のあまり強きに失し、油の用の方にも、多きに過ぎ
たる如し、未だ以て至妙とハ、いひかたし、蓋し其製造と、
調理とに、今一賞の功を虧く所ありん、若し調理の妙をい
え、あるの煮て出たる、鵝夷子の口小適するに如く

と、つくも、寒措大の、藜藿小の、馴まざる口小い、さもあ
りあんと、嘲けしは、世方もまけと、い、やとよ、西洋心醉家
の口小ら、皮相しけりても、彼小似たるものを、昔とて、か
う國固有の物ハ、かゝるとに美あると、おの、蔬菜とて、賤しむ
なりめとけ、し、且飲ミ且食ひ、且談し、且笑ひ、うち興を
るうち、世家の主の、父母とも年をけて、健く小あるなるを、
まゝえきせ、アさんとて、ともなひ出つ、父ハ、久太郎とて、今
年八十四歳、母ハ、けやとよひ、八十一歳ありとて、久太郎ハ、
耳ハ、遠けととも、腰ハ、屈まを、齒も全く、落ちを、眼も明ら
か小て、今にても、日毎小鈍と、鎌とを、腰に、星を、戴て、山小

しるふとに。おのれもいさう酔ひふさぎ。やうて杯盤をい
さ免て。うらみぬ。

十六日

曉四時四十五分。千歳丸。神湊の沖小着きしる。よ。報一來
る。宿の家族とも。名残惜にて。女も涙をうり。何うか頻か
ふ。つくと。詞まかすを定免て。恙なくま。せふとの事小
やあ。ん。おのれも。此家のよのとも。いとま免く。い
ふ。も。り。く。れ。に。又。いつ。來。る。こ。と。あ。る。一。し。も。思。を。祿。を。
去。り。あ。く。ぬ。う。ら。し。て。り。り。あ。る。も。む。け。小。と。て。鳳。尾
蕉。二。三。株。得。き。せ。い。は。い。彼の。未。子。三。り。お。く。り。た。る。シ。ダ。と

共小携へて。本船小乗りに免。十時十分。神湊を發したり。
りふ。天氣よく。波こと小穏。ゆる。ゆる。と。か。の。黒。瀬。小。さ
し。か。り。た。ま。と。黒。瀬。あり。と。覺。え。ぬ。ち。かり。なり。き。船。中
あ。ふ。人。の。少。う。り。け。る。い。海。の。穏。あ。る。よ。い。よ。る。一。し。と。し。
と。と。一。よ。い。船。小。慣。れ。し。る。に。て。も。あ。る。一。し。三。時。過。る。頃。船
と。御。倉。島。の。東。を。過。き。五。時。頃。小。い。三。宅。島。を。左。舷。小。望。む。か
くて。十七日。の。午。前。零。時。頃。よ。い。ち。や。く。と。相。摸。の。觀。音。崎。燈
臺。の。下。小。至。り。り。る。が。夜。明。け。さ。る。に。横。濱。へ。着。き。て。い。不。便
あ。ま。い。と。て。こ。と。ま。ま。に。進。行。を。緩。め。六。時。三。十。分。船。恙。あ
く。横。濱。小。は。き。ぬ。心。静。小。上。陸。し。お。の。く。相。別。を。て。宿。小。い

より、あきけり、九時四十五分發の瀛車少て東京小
歸り着く、此の日の行程、船路、海
里小て、凡三百五十五里餘に、陸路、僅小三十八里小
過す、山小上り、徑路小入り、内地の馬を馳せ、車を驅
る、危険のところ多く、陸路も、内地の馬を馳せ、車を驅
る、きの比小、然るに一人の怪我せり、幸なりき、聞く所小、
重患小、かり、幸なりき、聞く所小、
ま、今回の徴兵検査小合格の、七島及び屬島を合せ
て、三十五名なり、と云ふ、海産の調査、関澤、別小報
告書、内務省、裁判所、大学院、東京府等の一行、各自復

命を、官守となし、言責
とあけ、目小觸、耳小聞、事とを、
書き、後、備忘、とあき、小なり、時小、明治二十年六月五
日あり、

伊豆島巡視緒餘

竹中邦香稿

將遊伊豆諸島口占一絕

性癖從來山水耽。西肥東奧路能諳。題名未遍扶桑裏。又役吟魂向海南。

大島雜詩

千賀岬

右指房州左豆州。居然形勝扼咽喉。煤煙一帶橫天半。知是火船來歐洲。

岡田村途上

滿山櫻樹爛芳菲。榛莽堆中張錦幃。可惜村民作薪去。不關花發又花飛。

泉津村有行者窟。傳云昔役小角謫于此。修法窟中。

鎮八雄圖早已空。覺師遺跡亦難窮。却是區々剩窟。千載居民禮役公。源爲朝僧文覺亦嘗謫于此島。

新島村曉望

隔海峰巒影漸浮。宿鴉初出遠林頭。輕風忽捲水煙去。一點殘燈認豆州。下田瓜木岬燈臺見于西位。

差木地村沿岸海濤甚壯。

決昔偏驚氣象豪。淺沙無地可容舠。行々十里風吹霧。衝岸潮頭山樣高。

上三原山

蓬勃火坑山頂開。探尋載筆上崔嵬。天公恐我漏深秘。故起雲煙塗抹來。

雲霧和風望渺漫。飛塵撲面步行難。誰知四月火山上。却做沙場秋末看。

大島女子之俗有與內地異者。詩以記之。

不涅瓠犀不剃眉。臉邊誰識着胭脂。華年老媪破瓜女。一樣鴉鬟腦後垂。

綿布春衣新製裁。漆成烏鵲色相猜。纔將徽號誇豪富。金線紅絲刺繡來。

各自裹頭藍纈巾。謳歌為伴伐荆薪。歸來濶步羊腸路。頭上如忘載百鈞。

雨霽後山鹹草肥。侵晨采々露霑衣。一炊和麥粥將

熟。且待阿郎收網歸。鹹草方言阿志多葉。島民採食之。

船中望利島

形狀雖然小似瓶。嶄然頭角出滄溟。認做島洲疑未是。誰築假山如許青。

新島

兩山犄角勢崢嶸。一帶中間地稍平。莫恠汀沙白於雪。神人曾是燕潮成。

若鄉至新島本村舟中

紅霞綠樹丹青潤。怪石奇崑水墨浮。活畫圖開何所比。併觀摩詰典營邱。

小舸自新島至敷寧

棹歌遙向敷寧浦。水靄依稀籠遠樹。四隻輕舟飽孕風。一齊衝破半蓑雨。

神津島望富士山

浪游絕海便思家。誰識今朝喜色加。天半芙蓉來照

眼馬頭不啻米囊花。

神集定神社古阿波神也。文武帝時有靈威。授從五位下。事見續日本紀。

天上山容鎮儼然。殿堂竒構想當年。恠來神亦戀名利。辛苦示靈求位田。天上山名

三宅島雜詠

黃楊林底路高低。杜宇流鶯相和啼。僻島誰言語音惡。此聲入耳不曾迷。島中多黃楊

幾隊輕帆破曉回。飛魚網得積成堆。千頭萬尾誰能計。唯訝船船載雪來。頃每村漁文鱈魚所獲極多。文鱈魚俗曰飛魚。

島中無復毒蛇蟠。曾是神靈一斬殫。千年遺劍依然

在。光銚凜凜逼人寒。島中絕無蛇虺之屬。傳云上古三島神斬蛇。故然。劍今尚藏于

島長生氏家。

谷變陵遷頃刻間。劫餘光景膽猶寒。十年未着青青

草。焦石燒砂望渺漫。明治九年神着村有噴火之變。害及數里。其地今尚不生草。

至誠感神從古同。偶然祈雨奏竒功。泉津山上一弓

地。父老于今祭井翁。天保中有井上真鐵者。唱唯

一歲遇旱。祈雨有驗。從是神教盛行。泉津山在伊谷村。

觀英一蝶畫有感

俠骨稜々死不悔。至今遺墨餘香在。當年設免竄流

冤猶把風流應待罪。

晚上雄山絕頂。懷谷農商務大臣在歐洲。

雄山高處思飄揚。遙望美人天一方。征鷓低迷帆影絕。晚煙遮斷太平洋。

船中望御倉島。島有瀑布直注海。頗奇觀。

絕島壯觀堪盪胸。丹崖翠壁太重々。飛泉百尺迎風動。彷彿中天躍白龍。

渡黑瀨

潮勢騰奔似決河。檣頭搖動欲舐波。自非火力能凌險。一夜漂流東薩加。黑瀨。在八丈島御倉島間。潮流甚急。其脈自臺灣起。至魯領東

薩加云。

船中夜望八丈島

西傾弦月照船頭。遙見洋心島影浮。突兀三峰成鼎立。恍疑身是到仙洲。

冒雨上八丈島。遂至三根村。途中口占。

陰雲如墨抹嶙峋。岸樹帶煙連綠筠。衝雨笠蓑何所似。南宮畫裏一行人。

吊浮田秀家墓

一睹乾坤膽何大。獨嗟石豎誤機會。投鞭如使絕蘇河。濃尾以西歸秀賴。

絕海遙懷房職之思歸不得事堪悲。飡餘一半裹巾日。就與濃山飢渴時。

保得餘生五十年。櫻花一樹至今傳。請看曾屬西軍者。有幾兒孫守墓田。秀家在島五十年。八十一而歿。墓栽櫻為表。島民稱浮田櫻。

八丈島雜詠

當日誰曾此泛航。徐生采藥事荒唐。無何千載逸文獻。一任居民說八郎。

海氣初晴天蔚藍。宛然八朶聳青嵐。元知蓮嶽扶桑鎮。留個兒孫歷海南。甌峯俗稱小富士。以形似也。

東山蒼翠西山赭。劃斷五村分上下。僻島偏驚風土

佳。稻梁田接桑麻野。島中五村。分為坂上坂下。

神止山南望渺茫。甘藷葉紫麥將黃。年年收穫賴誰力。英斷無人說簡堂。神止山麓有平野。土人墾為田。天保中災異洊至。乃以為神崇。請廢為原野。縣令羽倉用九斷而不允。尔後無復災異云。簡堂用九別號。

節過清明蠶事忙。家々齊祭馬頭孃。兒童猶謝上村學。提篋侵晨采女桑。島中小學。蠶時閉校。以易其日休業。

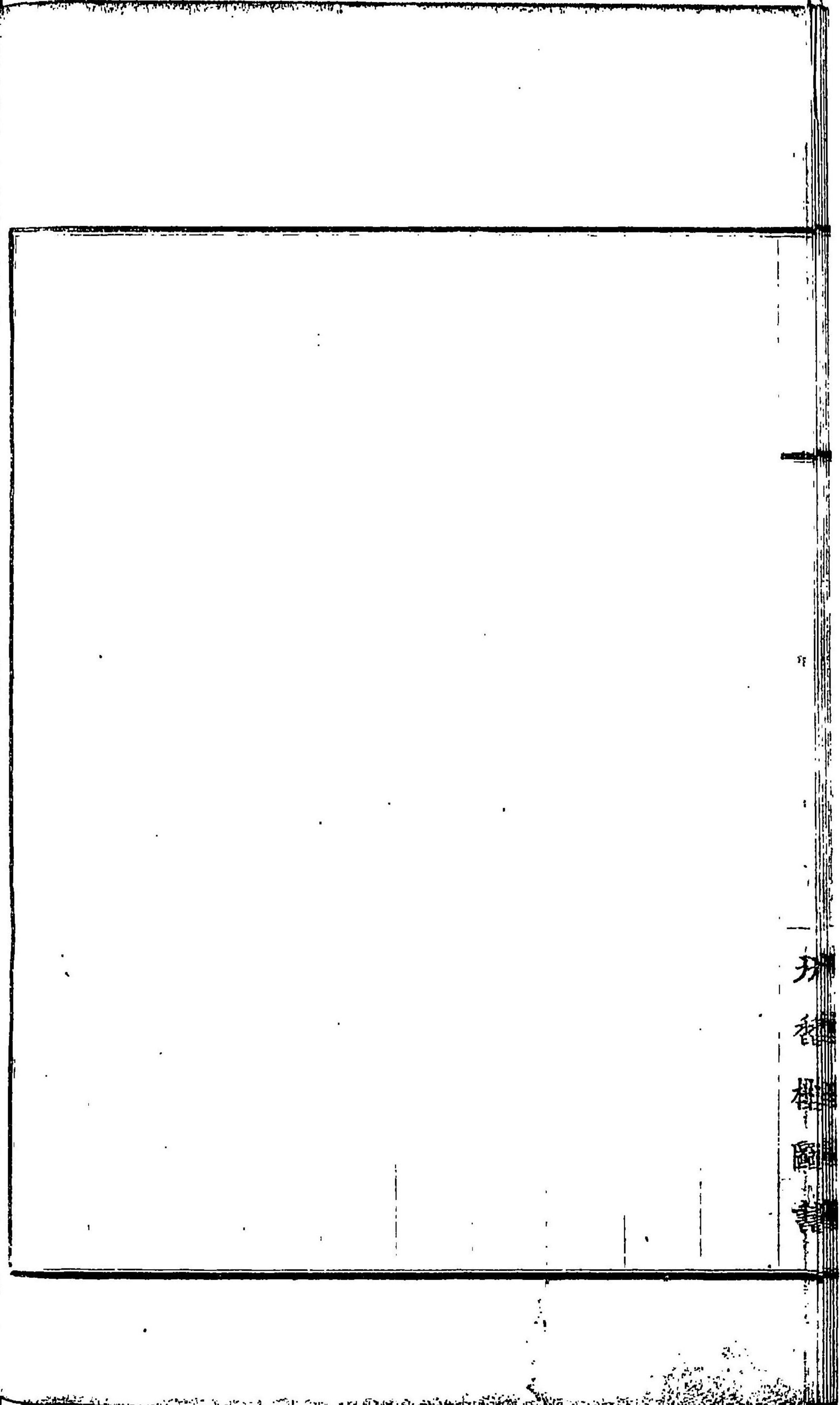
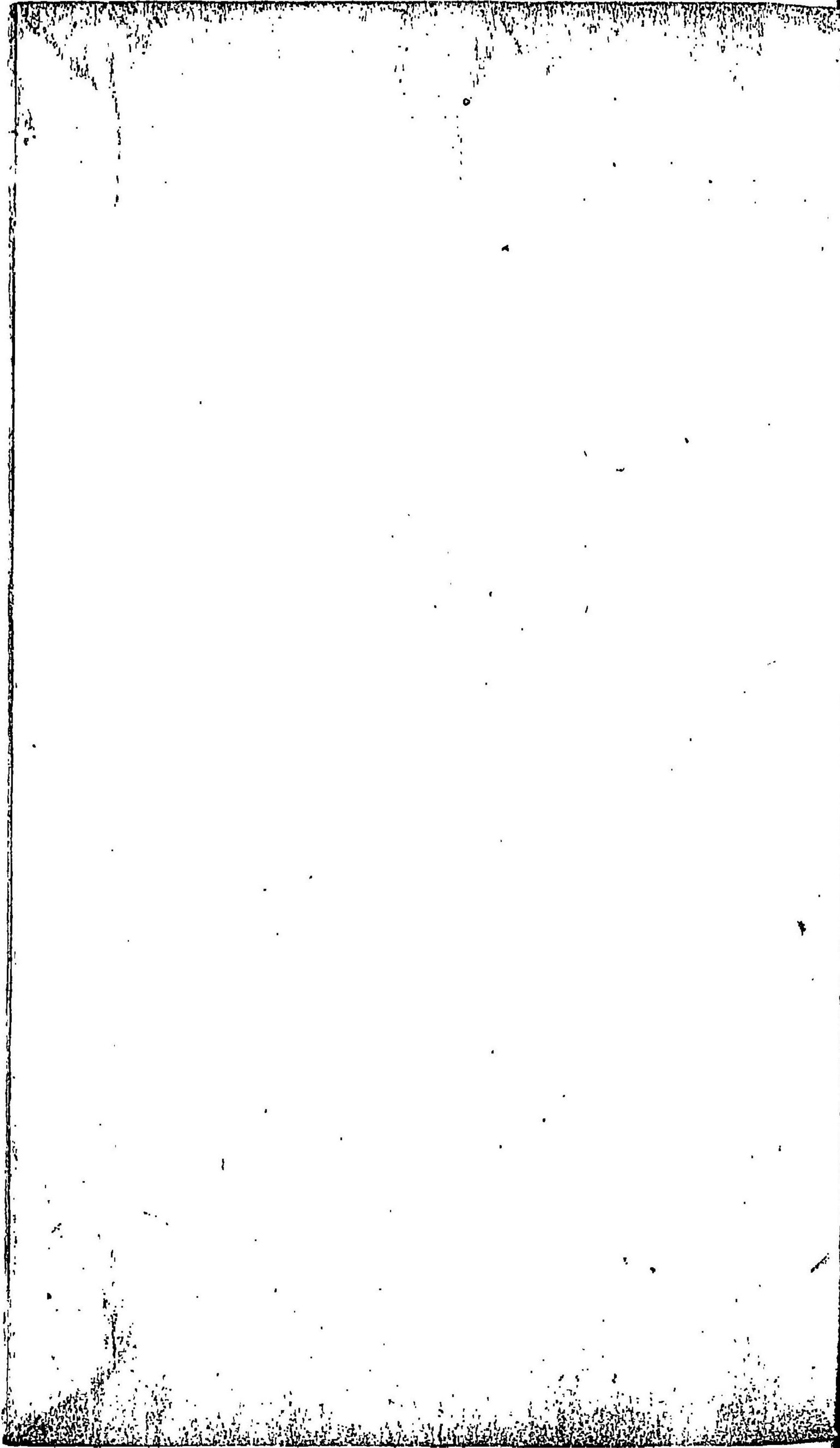
天竺桂皮兼蓋草。淡黃濃褐染來好。條紋八策如斯長。貢絹織成誰最早。島俗貢絹。鯨尺四尺。為一策。八策為一匹。

蕃史曾傳女國名。至今伉儷未持平。欲知千載遺風在。租稅都從機杼生。島中女多於男。故曰女國。女國名。見後漢書及文獻通考。太平

御覽
等。

新編
御覽

一
御覽



一
并
香
桂
園
書

